

第21図 4Cグリッド(5、6、8、9)、4C・3Dグリッド(7) 出土土器実測図

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
167 168	IX	いずれも深鉢の口縁部破片で、地文に集合条線が施されている。167は口縁に2本の平行沈線と縦の刻みが施されている。168は隆帯が貼り付けられている。キャリバー状の深鉢になるかも知れない。	胎土、焼成は同上。色調は167が明赤褐色で、168が内面が褐灰色で、外表面がぶい橙色を呈する。	4 Dグリッド
170 173	III a	キャリバー状口縁を有する深鉢。171、172はモチーフがかなり沈線化している。173は胴部の一部も観察される。地文の縄文はいずれもR L。	胎土、焼成は同上。色調は171がぶい橙色だが、他は暗赤褐色を基調としている。	4 C + 3 Dグリッド
174 176	III b	縄文を地文とし隆帯の貼り付けられた深鉢の胴部破片。隆帯断面は174、176は三角を呈する。沈線は添えられていない。	胎土、焼成は同上。色調は、174、176の外表面、175の内面が黒褐色で、174、176の内面、175の外表面がぶい橙色を示す。	4 C + 3 Dグリッド
177	III e	矢羽根状沈線を地文とし、隆帯の貼り付けられた深鉢の胴部破片。隆帯断面はカマボコ状で、沈線が添えられている。	胎土、焼成は同上。色調は橙色。	4 C + 3 Dグリッド
178	III d	集合条線を地文とし、蛇行隆帯が貼り付けられている。隆帯断面はカマボコ状で沈線は添えられていない。	胎土、焼成は同上で一般的。色調は黒褐色を呈する。	4 C + 3 Dグリッド
179	IV a	縄文地上に沈線による懸垂文がある深鉢の胴部破片。地文は2段の縄R Lの継ぎ回転。	胎土、焼成は同上。色調はぶい橙色。	4 C + 3 Dグリッド
180 182 192 193 195	VII c	縄文を地文とした連弧文土器である。180～182、192は2段の縄R Lが施文されている。192は一部で羽状化している。193、196には連弧文間に渦巻風のモチーフが配されているようであるが詳しく述べられない。	胎土、焼成は同上。色調は褐灰色～明赤褐色で一般的であろう。 181は輪積み部での副産資料。	4 C + 3 Dグリッド
194	VII a	撚糸Lを地文とした連弧文土器。連弧を描く沈線は通常3本だが、本資料は2本である。	胎土、焼成は同上。色調は、内面が灰褐色で、外表面がぶい橙色。	4 C + 3 Dグリッド
184	IV c	地文が集合条線の深鉢であり、籠による蛇行沈線と懸垂文が見られる。	胎土、焼成は同上。色調は、内面がぶい赤褐色で、外表面が黒色。	4 C + 3 Dグリッド
183 197	IX	両者とも、深鉢であるが、183はそのモチーフが不明瞭なので当類に含めた。197は口縁部に刻み列を配し、器面には浅い沈線による波状のモチーフが描かれていると考えられる。197の地文には2段の縄R Lが横位に回転施文されている。	胎土、焼成は同上で当遺跡では一般的。色調は183がやや暗いが明赤褐色を呈している。 197は加曾利E III式土器	4 C + 3 Dグリッド
185 1	VI	文様が観察されない深鉢の各部破片。185と	胎土、焼成は同上。色調は、188	4 C + 3 Dグリッド

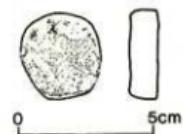
番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
191		186は同一個体の口縁部破片で頸部までは無文で胴部にはⅢ類ないしIV類と同モチーフの展開が推定される特徴的な一器種である。	が内面が明褐灰色で外面が黒褐色を呈するが、他は全てほぼ暗赤褐色である。	リッド
195	VII	外反ぎみの口縁部には挽沈線が溝遍なく縦に配され、頸部には側縁に交互刺突を伴った隆線が波状にめぐらされる。	胎土、焼成は同上だが、やや砂粒が大きく、多い。色調は内面が橙色で、外面が赤褐色を示す。二次的火熱を受けているようだ。	4C・3Dグリッド
198	X a	深鉢の胴部破片。2段の縄R LとL Rの2種類を交互に縦位施文することで矢羽根状の羽状縞文を構成している。	胎土には砂粒がかなり目立つ。焼成は良好なのだろうが脆い。色調は内面が橙色で、外面がくろい橙色。輪積み部での剥離資料。	4C・3Dグリッド
199	X b	深鉢の胴部破片。地文の撚糸しが観察されるのみ。	胎土、焼成は一般的。色調は内外面共に明赤褐色を呈する。	4C・3Dグリッド
200	X c	深鉢の胴部破片。地文には集合条線が施される。	胎土、焼成は同上。色調は内面が暗赤褐色で、外面が灰褐色。	4C・3Dグリッド

(鈴木敏昭)

b. 土製品

土製円板（第22図）

大きさが3.2cm×3.0cm、厚さが1.1cmのほぼ円形を呈する。色調は、表が暗赤褐色で、裏が黒色を示している。胎土、焼成、色調等から当該地域の加曾利E式土器片に酷似することは疑問の余地が無いが、如何せん深鉢の無文部破片を使用しており、その詳細な時間的帰属は不明瞭と言わざるをえない。また、用途等の窺える痕跡も皆無である。



(鈴木敏昭)

第22図 土製円板拓影図

c. 石器（第25図10～第28図36）

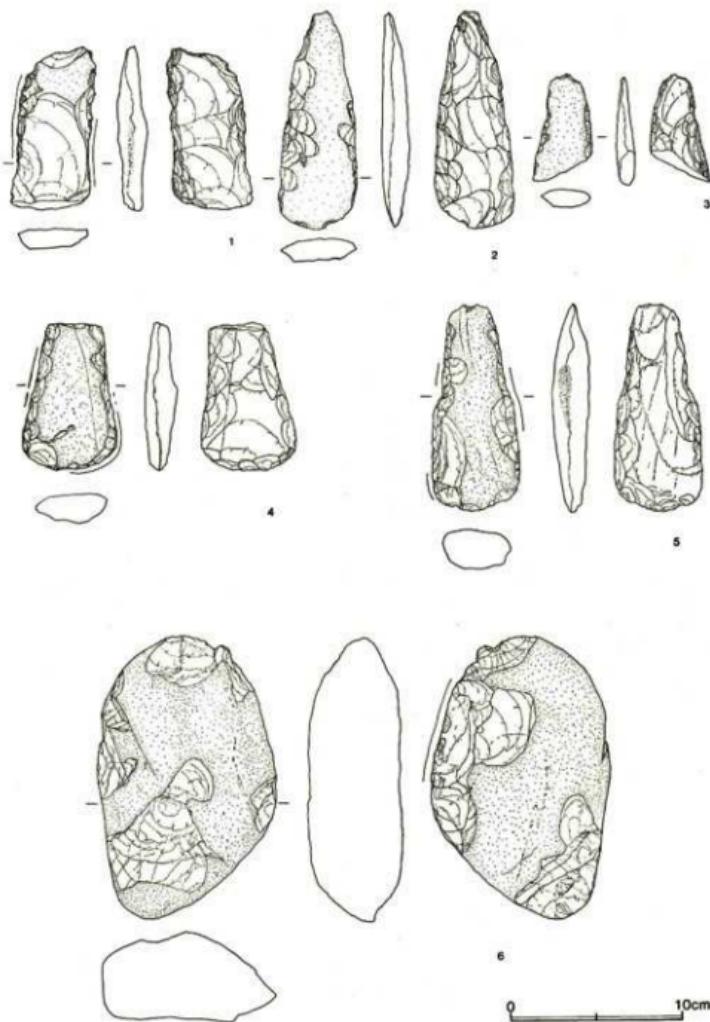
10. 打製石斧(III-b) 1Cグリッド出土。左右の両側縁はほぼ平行するが、胴中央に幅が狭く浅い抉り込みを持つ。一般的に短冊形と言われるものの中央部に抉り込みを設けたような形態である。上から下に向けて厚みが減ずる。片面には自然面が残る。磨滅は抉り部を中心とした箇所と刃部と思われる下端に顕著に認められる。剝離順位は上→下を基本とする。

11. 使用痕のある剝片 1Cグリッド出土。ほぼ中程に頂点を持つ分厚い剝片である。裏面右斜め下方からの一打により剝離されている。その後、数回の細かな剝離が周縁に施され現状を呈する。さらに、正面凹下縁と右側縁下部にはより細かな剝離が観察される。これは恐らく使用によるものと解釈される。スクレイパーとして、あるいは打撃具として使用されたものであろうか。刃部は片刃でほぼ直線的である。

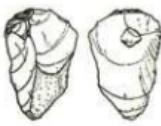
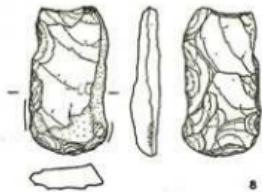
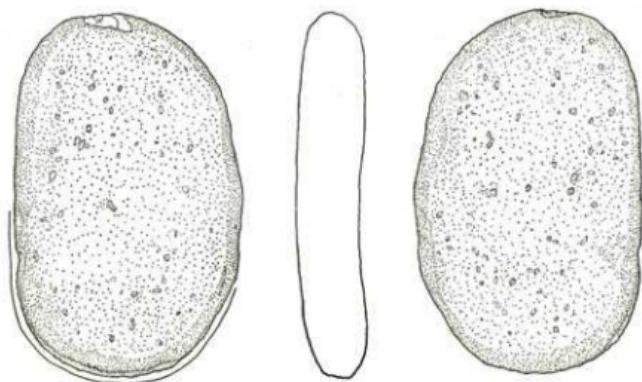
12. 打製石斧(I-b) 1Eグリッド出土。両側縁はほぼ平行するが、胴部中央に浅い抉りが見られる。片面に自然面を残し、やや分厚く重量感がある。下半部は欠損。磨滅は正面図右側縁の抉りの入った部分に集中的に、また著しく認められる。剝離順位は上→下が基本となっている。
13. 打製石斧(I-b) 2Dグリッド出土。両側縁は平行するが正面図の右側縁は若干浅く抉れる。片面にはごく一部に自然面が残され、やや分厚く作出されている。刃部は中程で突出しており、片刃状を呈する。胴中央部よりやや上には磨滅痕（あるいは敲打痕とさえ思われる）が顯著に見られる。剝離順位は上→下を基本としている。
14. 打製石斧(II-d) 2Eグリッド出土。両側縁は刃部に向かってやや開く。刃部は弧状をなす。片面はほぼ自然面のままで、上半部に調整剝離が施されているにすぎない。磨滅等の使用痕は頭部を除き全周にわたっている。刃部は極度の使用によるのかは判然としないが非常に鈍い。剝離順位は右→左、上→下へと観察される。すなわち、正面図の右側縁の上部から下に向かって開始された剝離作業は、次に左側縁の上から下へ、そして裏面の右側縁上部から下へ、左側縁の上から下へというように進行したのである。
15. 打製石斧(III-b) 3Dグリッド出土。両側縁に浅い抉り込みを持ち、上縁、下縁共に弧状を呈している。全体的に風化が激しく剝離等の観察には困難をきわめた。自然面の有無も決定的ではないがとりあえず認められない。
16. 打製石斧(II-c) 3Dグリッド出土。頭部が尖り、両側縁は直線的な刃部に向かって開く。全体的には比較的幅の狭い二等辺三角形形状を呈する。片面には自然面が残る。使用痕等は全く認められなかつた。
17. 打製石斧(III-a) 4Cグリッド出土。両側縁に大きく深い抉り込みを持つ。刃部と思われる下端部は節理面で剝離してしまっている。片面には大きく自然面が残される。敲打もしくは磨滅痕は抉り部に集中しており、顯著である。基本的な剝離の順位は左→右、上→下である。本資料は全長に比較して幅が広い。
18. 打製石斧(III-b) 4Cグリッド出土。胴中央に抉り込みを持ち、上下両縁は弧状を呈する。片面には自然面が極めて広く残される。磨滅痕は全体に顯著ではなく、正面図の左側縁にある抉り部から刃部へかけて観察される。
19. 打製石斧(III-a) 4Cグリッド出土。胴中央部に深く大きな抉入部を有する。上下両端は突出している。石斧の身は上から下に向けて厚さが増す。片面には自然面が残される。磨滅は両側縁の抉入部と上下両縁にみられる。とりわけ上縁の磨滅は著しい。
20. 打製石斧(I-b) 4Cグリッド出土。非常に分厚い作りである。両側縁はほぼ平行する。刃部は比較的鋭く顯著な使用痕は認められない。自然面は全く残さないが、身が反るように剝離されている。磨滅（敲打）痕は正面図の右側縁にみられる。剝離は上→下へ順番に加えられた後、頭部を左→右へと実施された。
21. 打製石斧(III-a?) 4Cグリッド出土。大半は節理面で折損しており、刃部のみの資料である。身はかなり分厚い。恐らく、19と類似した形態をとるのであろう。片面には自然面が残される。刃部先端部には極度の磨滅痕がある。また、裏面の剝離間の稜線上にも磨滅痕が認められる。

25. 削片 3 A グリッド出土。正面觀は半月状を呈する。断面は三角形である。
26. 削片 3 A グリッド出土。一見、小形の分銅形打製石斧の下半部と見まごう形状を示す。下縁に刃部は見られない。また、側縁にも使用痕跡等は認められない。
27. 削片 4 C グリッド出土。黒耀石製。非常に小さい。表面は全体に風化して鈍い感じの輝きがある。
28. 削片 4 C グリッド出土。黒耀石製。透明度は比較的良好で不純物の含有は少ない。
29. 削片 4 C グリッド出土。黒耀石製。ほぼ中央に稜を有する断面三角形の削片であり、一部に自然面を残す。なお、27~29の黒耀石は同一母岩によると思われる。
30. 削片 4 C グリッド出土。自然面が残されている削片で、使用痕等は観察されない。断面はほぼ三角で、正面觀は筋錐形に近い形を呈する。
31. 削片 4 C グリッド出土。断面は三角形を示し、下半部は欠損している。自然面は帯状に残されている。
32. 削片 4 C グリッド出土。正面図のほぼ中央に稜を有する、断面三角形の分厚い削片である。下半部は欠損している。
33. 使用痕のある削片 調査区外表採。上部は分厚いが、下縁には鋭い刃部を有する。刃のつき方はほぼ直線的である。削片は、裏面図で言えば右斜め上方よりの加撃で剝離されたものである。正面図の左側縁にも使用痕と考えられる微細な剝離が認められる。スクレイパー的に使用されたものだろうか。片面には自然面が残されている。上端も自然面である。
34. 打製石斧(I-a) 調査区外表採。両側縁はほぼ平行し、刃部は直線的に形成されている。右肩部が一部欠損している。自然面は片面に残されている。身は頭部から刃部に向かうにつれて厚みを減ずる。剝離の順序は両側縁共に上→下である。
35. 打製石斧(I-b) 調査区外表採。正面図の左側縁は緩やかで浅く抉れている。片面には自然面が残される。刃部の鋭さは弱い。敲打もしくは磨滅の痕跡は頭部と右側縁に認められる。剝離の順序は上→下を基本としているのだが、裏面については若干不明瞭である。
36. 敲石 調査区外表採。図示された剝離でも上部のものは遺存中にできたものである。敲打面は下端部が概当する。他は自然の面をそのまま残す。

(松村和男)

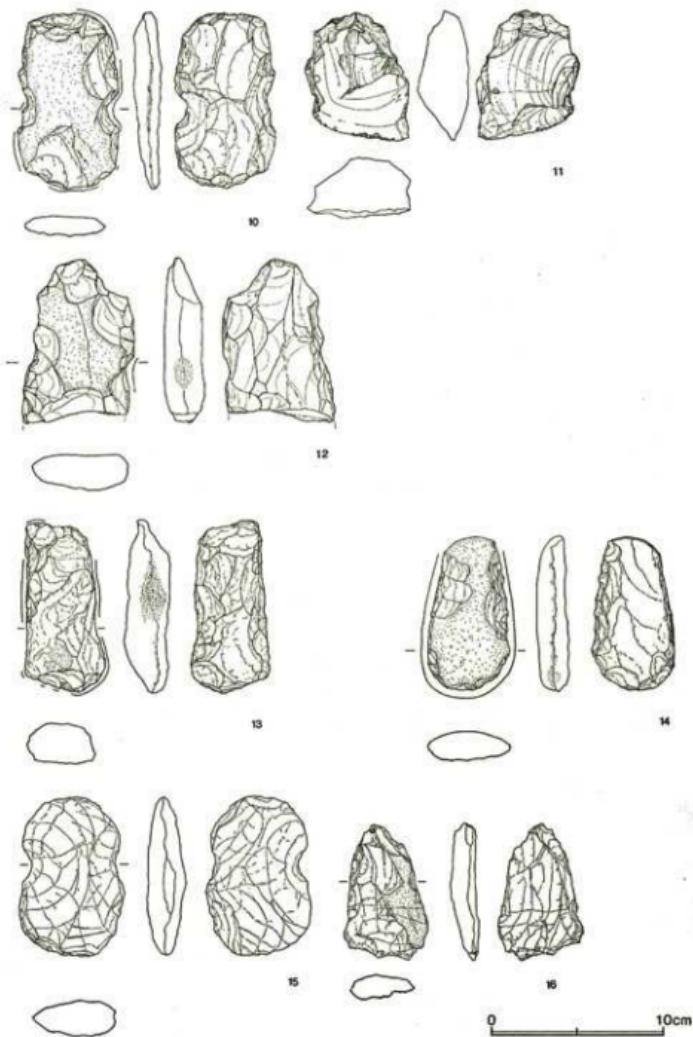


第23図 第1号住居跡(1～3)、第13号土壤(4)、第14号土壤(5)、第15号土壤(6) 出土石器実測図

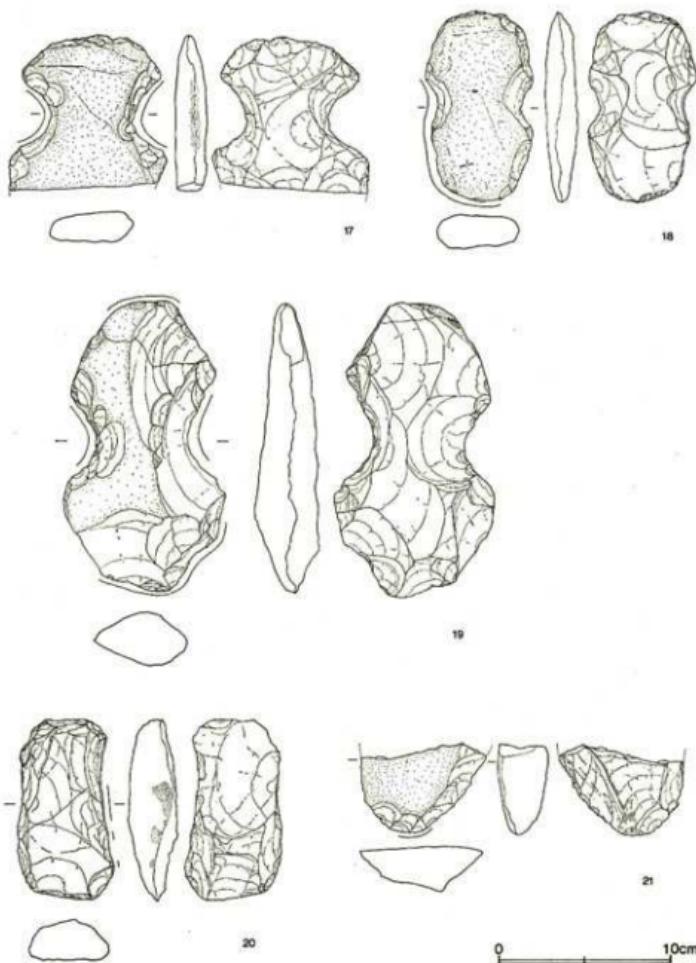


0 10cm

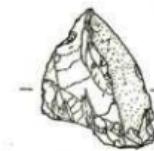
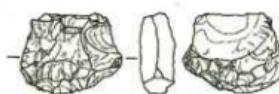
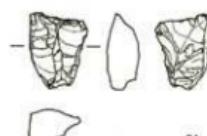
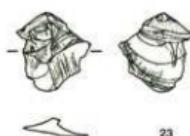
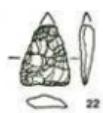
第24図 第15号土壤(7)、第19号土壤(8～9) 出土石器実測図



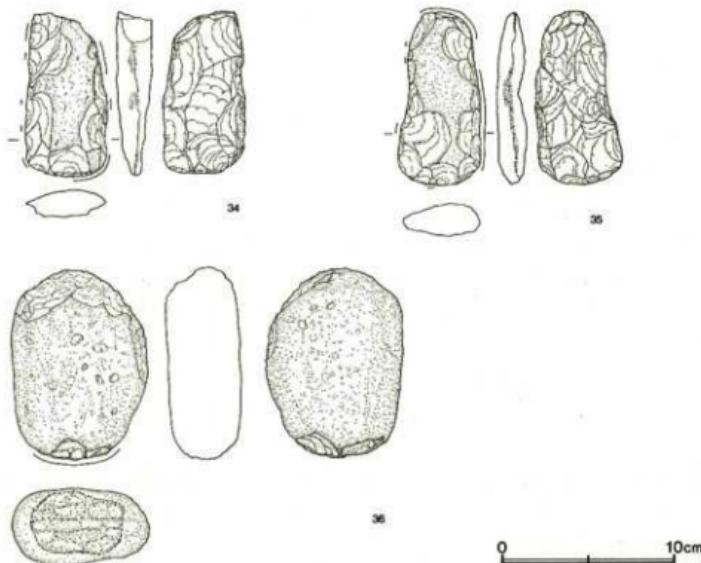
第25図 グリッド出土石器実測図



第26図 グリッド出土石器実測図



第27図 第1号住居跡(22)、第13号土壤(23)、第15号土壤(24)、グリッド(25～32)出土及び
調査区外表面採(33) 石器実測図



第28図 調査区外表採石器

VI 結 語

1. <焼石土壙>について

下南原遺跡から、合計23基の土壙が検出されたことはすでに記した。個々の説明については、それを参照願いたいが、ここでは第3号とした焼石を伴う土壙について若干検討しておきたい。第3号土壙は3Cグリッドで検出され、平面形は円で、断面形は皿状を呈する。焼石は土壙上面に集石されており、堆積土中にも炭化物粒子は多く含まれていた。約10m南には第1号住居跡があり、住居跡としての可能性もすぐれた。4Cグリッドは、すぐ西接している。以上のように、この焼石土壙は、集落空間の中で住居跡が配置される部分と重なるように設けられていたかのごとく観察されるが、下南原遺跡の場合は集落のごく一部である点や、他の土壙もまた多く隣接している点なども考えあわせると即断は許されない。

ここで、少し視野を広げ、焼石土壙の県内各遺跡での検出例にあたってみたい。以下に報告書からの引用を記すが、遺跡の立地、環境等は同報告書に譲り、類似遺構が集落のどの位置から検出されたかに的を絞りたい。類似遺構とは、焼石を集中的に確認できたものについて便宜的に総称したが、実際には土壙の有無、その他に形態分類が可能であろう。ここでは、とりあえず集石土壙の集石自体が熱を受けているものに限定して触ることにした。

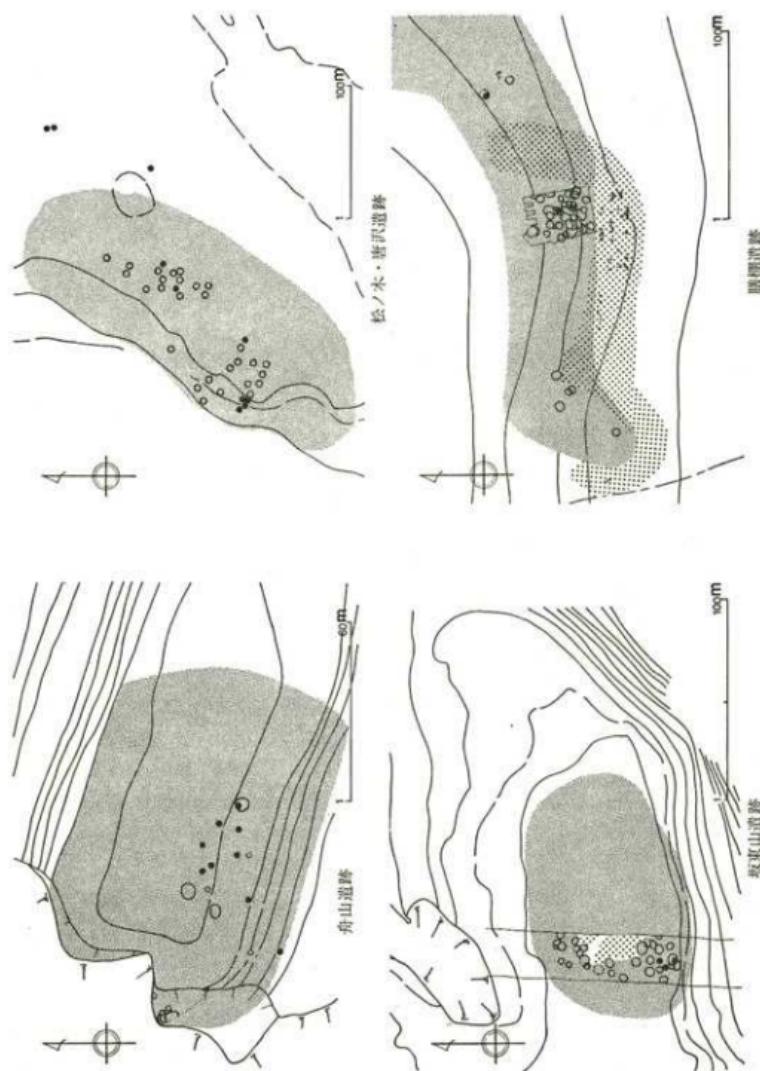
1. 膨脹土壙(岩井1970) 住居群は標高80.0m～87.5mの等高線に沿って列状に近い弧状を呈するかのように、縄文中期を主体とした住居跡が50軒検出された。住居群の南側の緩斜面上には土壙群が位置している。類似遺構は33号住居跡内に検出された。加曾利E I式。第4次調査(飯田1981)が第1・2次調査区の東側50m程離れた地点で行われた。2軒の縄文中期の住居跡が発掘され、うち1号住居覆土中に類似遺構が構築されていた。加曾利E III式。

2. 内畑遺跡(谷井1970) 住居群は前期黒浜式であり、土壙群は中期に比定される。つまり、土壙群は住居群とは異なった部分に造成されていたと考えられる。類似遺構は切り合い関係にある3・4・5号住の西側、約6mの地点で検出されている。

3. 平松台遺跡(金井塚1968) 台地全面が発掘されている。住居跡は前期が20軒、中期が9軒調査されており、土壙も50ヶ所以上発見されている。土壙群は住居跡の拡がりに伴った分布状況を示している。東側には緩斜面の為、削り取られている部分もある。住居群は等高線に沿って、東側に集中し弧状に位置する。類似遺構は3～5号住の間にかけて10基検出されている。

4. 岩の上遺跡(栗原1973) 発掘調査は集落の中央部を縦断して実施されたと考えられている。住居跡は縄文中期が23軒、後期が3軒で、土壙が6基検出されている。類似遺構は17号住居跡内から検出されている。

5. 坂東山遺跡(谷井1973) A地点から縄文中期の住居跡が31軒検出されている。集落は台地上に形成されており、住居群の構成は、小舌状台地の基部中央を頂点として弧状に拡がっている。発



第29図 集落における焼石土壤の空間配置図

掘区は小舌状台地全面に展開している長楕円形集落の西端部分に設定されたと考えられている。集落が東側に延びることは、昭和56年の発掘で確認され、住居跡が100軒以上検出されている。この報告が加われば、集落の全貌に近いものが解明されよう。広場空間の幅は30m前後と推定されており、それを囲むように幅20m～25mの帯状の住居群が配置されているようである。中期の土壙は住居群の内帶を中心に、住居群内帶や外帶にまで及び65基から成っている。称名寺式の土壙は、中期の住居群や土壙群に規制されずに全体的に拡がり、15基発見されている。類似遺構は3基検出されている。1基は9号住居跡の覆土内で、もう1基は13号住居跡の南から発見された。この2基は中期に比定されている。もう1基は後期、称名寺式期の土壙である。これらは、住居群の内側に群在する中期土壙群31基中には含まれない。

6. 花影遺跡(谷井1974) 繩文中期の住居跡は発掘区の北側に集中して発見され、南側には土壙群が集中していた。遺跡は等高線に沿って東北へ拡がると思われ、西端を発掘したこととなろう。類似遺構は3基検出されている。第8号土壙、第9号土壙がそれで並んで検出された。もう1基も第9号土壙の南で検出されており、中期に比定される29基の土壙が集中した部分に重なって発見されたと言える。

7. 吹上貝塚(栗原1959) 遺跡の詳細は不明瞭であるが3軒の縄文中期の住居跡が発掘されている。類似遺構は第1号、第3号住居跡内で検出された。

8. 鶴ヶ丘遺跡(谷井1976) 類似遺構が検出されたG区は、F区と一緒にして1つの遺跡と考えられる。弥生時代の集落跡であり、縄文時代の遺構は、3基の土壙のみである。類似遺構はG区第8号址である。

9. 島之上遺跡(笹森1977) 南北に長い集落跡と思われる。発掘区は集落の北端部を横切っており、標高の高い所に遺構が確認されており、集落は微高地の中でも一番高い地点を選んで、東西が20m～30m、南北が250mの幅で列状に営まれているであろうと述べられている。発掘では4軒の縄文中期の住居跡が検出されている。類似遺構は発掘区の東端、1号住の南東13mの地点で発見された。

10. 出口遺跡(笹森1977) 島之上遺跡の北西500mに位置する。遺跡は西側の浅い谷に沿い、南北100m、東西300m程に拡がっている。発掘区は遺跡の西端部を横切るように設定された。調査では9軒の中期の住居跡が検出された。類似遺構は1基で、2号住の南東10m、6号住の北西6mに位置しており、ちょうど2軒の住居にはさまれたように検出された。

11. 甘粕原遺跡(並木1978) 遺跡は等高線に沿って位置すると思われる。発掘は遺跡の中央を南北に縱断する形で行われた。検出された住居跡は縄文前期5軒、中期3軒である。中期の集落は台地の北東側に位置すると思われる。類似遺構は前期に比定されており、7号住居跡から南西へ20m以上離れた地点で検出された。

12. 西原・大塚遺跡(宮野1975) 非常に狭い発掘区域の為、全体は不明瞭である。検出された住居跡は5軒、うち1軒は五領で残る4軒は縄文中期である。類似遺構は3号住居内で、炉を切つている状態で検出された。

13. 唐沢・松ノ木遺跡(佐々木1979、1・2・3) 同一集落と推定される遺跡である。遺跡は等高

線に沿って長楕円の弧状に拡がっていると思われる。発掘は4回にわたり実施された。合計23軒の中期の住居が検出された。類似遺構は、住居群中から7基、遺跡の主体部から東へ200mの地点で2基接して、さらに、東へ150m地点で1基の合計10基が検出されている。

14. 江光山遺跡(梅沢1980) A・B・C地点が発掘調査された。この中で、A・B地点から環状土壙群が検出された。しかし類似遺構は、A地点から西南の丘陵頂部へ連なる鞍部の住居跡内から検出された。この位置は、平坦面が幅30m程で、2軒の住居と炉跡が3ヶ所のみで、A・B地点の土壙も集落と離れて存在したものと述べられている。住居跡は中期加曾利E式期のものである。

15. 舟山遺跡(梅沢1980) 集落は台地の頂面近くのなだらかな傾斜の南西部に位置すると思われる。発掘区は南面する緩斜面上で、前期1軒、中期5軒の住居跡が検出された。類似遺構が10基検出されている。いずれも住居跡ラインよりも外側で検出されている。配石遺構も5基検出されているが、これらは内側頂面に面している。

以上のように管見に触れた県内資料だけでも15遺跡から合計45例が検出されている。ここで少し整理してみよう。住居跡内もしくは重複して検出された例が6、住居跡外で発見された例が39である。具体的な集落空間内での位置関係は、全体が窓えそうな遺跡に関しては推測を混じえた全測図(第29図)を用意したのでそれを参照願いたいが、膳棚遺跡、岩の上遺跡、坂東山遺跡、唐沢・松ノ木遺跡、江光山遺跡、舟山遺跡等に共通している点は、いわゆる焼石土壙は集落の中心部にあたる「広場」からは発見されず、住居群が配される帶状ゾーンに重疊するように、あるいはその外側に沿って検出される傾向にあったという点である。また、土壙群とは一線を引くような配置を示す傾向も一部で認められたが(江光山遺跡その他)花影遺跡のような類例もあり断定はできない。一方、他県での類例も着実に増えているようであり論文等も散見される。(杉山1976、佐々木1975、高山1974・1976)また、先土器時代の疊群との関連性も考慮されているようでもあり(岡本1981)、今後は形態分類を含めた再検討が必須となろう。さらに用途等を考慮するにあたり、メラネシア、ミクロネシア、東南アジア、北アメリカ等における民族調査の成果をも検討材料としておきたい。幸いにも、我々はひきつづき報告を予定している花園村台耕地遺跡、寄居町北塚屋遺跡においても多くの住居群とともに焼石土壙を検出しているので、早い機会での検討が許される状況にある。ここでは焼石土壙についての一面を指摘した。

(小島糸子)

2. 下南原遺跡出土土器群の分類と編年

本遺跡から出土した土器は総数1,356点で少ない。だが、第1号土壙の共伴資料をはじめとして、4Cグリッドでのまとまりのある出土状況は当該地域の加曾利E式土器群の実態を考えるうえで欠かすことのできない資料になるものと思われる。従って、ここではさらに詳しく類別し、編年の位置についても考えてみたい。なお、ここでの類別は4Cグリッド内での分類とは基準を異にしている。

第1類 口縁部文様帶と胴部懸垂文で象徴される加曾利E式土器の伝統的な土器であり、口縁部はキャリバー状を呈し、頸部に無文帶を持つ。(第11図69・70、第13図1、第20図4)

第2類 同じく、器形がキャリパー状を示すが、頸部の無文帯が見られず、文様帶は口縁部と胴部の2帯構造になっているもので、さらに以下のような2種に類別される。

- a. 潟巻文と梢円区画文が口縁部文様帶内で交互に配されるもの（第13図4、第18図158、第21図5）
- b. 潟巻文間が隆帯により連弧状に連絡されている為に、口縁部文様帶の下端部が波状を呈しているもの（第13図2・7、第20図1、第21図6）

第3類 内彎する、幅広の口縁部無文帯を有するもので、胴部には第1類、第2類と基本的には類似する文様が懸垂する。（第10図58、第11図80、第15図75・78～80、第19図185・186）

第4類 口縁部の小突起下には沈線による渦巻文が施され、その間には内部に1条の刺突列が充填された横長の区画文が配されているもので、伝統的な加曾利E式土器には類例を搜すことが困難なものである。口縁部文様帶の独立度は低い。（第20図2）

第5類 連弧文土器である。連弧を描く沈線は3本が多く、2本のものもある。口唇下にめぐらす沈線も通常3本だが、交互刺突が付加されているものもある。胴中位に存在する頸部にも、口縁部と同じ本数の沈線がめぐらされ胴部が上・下に分帶される。下南原遺跡の連弧文土器は以下の3種に基本分類される。

- a. 区画をつくるもの（第16図90、第20図3）
- b. 単純に連弧文が横に連続していくもの（第16図81～89・91～93、第18図155・156）
- c. 連弧が波状化しているもの（第10図63）

第6類 いわゆる曾利系統の土器と考えられるものであり、口縁部に重弧文を持つもの、縦位沈線文のものが出土している。（第11図89、第19図195）

第7類 同じく曾利系統の土器と考えられ、頸部に籠目文を持つもの。口縁部は他遺跡の例を参考にすれば幅広の無文帯となっているようである。（第16図94）

第8類 浅鉢。文様の有無、器形の違いから、便宜上以下のごとく分けておく。

- a. 外反した無文の口縁部と、屈曲あるいは膨んだ胴腹部を呈し、屈曲上部に文様帶をもつもの（第11図88、第17図117、第21図9）
- b. 上と同器形だが無文のもの（第9図18、第17図120）
- c. 口縁が逆「く」の字状に内屈する無文の浅鉢（第17図118）
- d. 平坦で角状に整形された口唇部をもつ浅鉢であり、やはり無文（第17図119・121）

第9類 その他の土器であり、第17図122は有孔鈎付土器かと考えている。

以上、主として口縁部を中心とした分類を加えた。

このうち、第1類とした土器群は頸部無文帯を有するという一点で、従来は加曾利E I式に含めて考えられていたようであるが、笹森氏の研究（笹森1977）以降は頸部無文帯の有無のみでは編年の絶対的な基準になりえないといわれているようでもあり、下南原遺跡の成果では時期については保留にせざるをえない。だが、たとえ隆帯自体の扁平化は否定できないとは言うものの、口縁部には隆帯主導型の渦巻きが描かれているという点を加味すると、型式学的には古くみなされるのが一般的であろう。しかし、型式に内包される時間概念と実態的な土器の動きとの間には未だ乖離が認め

られ複雑な現況を呈している。第3類も、第1類と類似した動きを示す土器群であり、やはりこれ以降は衰微する。第1類のキャリバー部を省略し、頸部無文帯の幅を若干拡げれば第3類の土器が完成される。つまり、第1類と第3類は同一構成原理に基づく土器群とみなせるのである。

第2類aは、器形の開きが緩やかで、頸部の屈曲もおだやかである。頸部には無文帯を持たない。口縁部文様帶は渦巻文と梢円区画文の交互配置が基本であり、沈線主導型の文様となっている。第1類に比し、型式学的には明らかに後出的である。なお、口縁部文様帶はほぼ一定の幅で帶状に配されている。一方、第2類bの口縁部文様帶は下端が渦巻を頂として連弧状にめぐらされている。胴部の懸垂文は連弧状隆帯から直接垂下しており、胴部文様帶の自立化は崩れ、口縁部文様帶に従属するようになっている。島の上2号住居跡（笠森1977）からも類例が出土している。これらの土器は坂東山12号住居跡（谷井1973）、勝棚4号住居跡（埼玉大学考古学研究会1970）、新座5号住居跡（酒詰1965）、中山谷6号住居跡（新藤1971）等からの系譜下にあると考えられるが、上記遺跡の土器群の構成をみると、帶状に区画された口縁部文様帶内に連弧状隆帯を配するという構成の土器はすでに一定の器種として存在していたように思われる。つまり、今まで同一視される傾向にあつた下南原遺跡でいう第2類a、bはそれぞれが別器種としての系統性を有していることが予想されるのである。第2類bと類似の文様構成をとる土器としては、甲信方面の曾利II式土器のうち渦巻つなぎ弧文と呼ばれるもの（末木1981）があげられる。一方、隆帯を取り払ってしまえば、一部の連弧文土器とも類似した点が観察される。（しかし、連弧文土器は当遺跡の第5類からも明らかなように、胴部を3本沈線等で画然と分帶するという点で、構造的には第2類bとは大きく異なる。）

第4類とした第20図2の土器は類例が乏しくて、埼玉県内では花影1号住居跡（谷井1974）のものにモチーフ等が近いが、平山橋5号住居跡の土器へと文様の系統はつながっていくものと考えられる。第5類とした連弧文土器は、いざれをとっても磨消導入以前のものであり、全体的には古く位置付けられる。第20図3の連弧文土器が第13図2の土器と共に存した事実は重要となろう。

第6・7類は異系統の土器であり、ほぼ曾利II式に併行させることができよう。

以上から、下南原遺跡出土の土器群は、実態的な土器の動きを重視すれば、全体的に加曾利E II式前葉に位置付けることが妥当であると考えられる。

一方、下南原遺跡には口縁部資料以外にも拓影図等で理解されるように、さらに多くの胴部資料がある。それらも当然、遺跡の性格の一端を表わしていると考えられる。しかし、現実には、それらは上記分類のどこに組み入れられるものかの判定が難しく、遺憾にも多くは一括して把えざるを得なかった。とりわけ、第1～3類とした土器の胴部には基本的な相違点が認められないようである。つまり、第1～3類の胴部には、地面上に直線と蛇行線が交互に懸垂されるのを一般的としており、また、各器種共に胴部文様帶の変容過程は類似していると言えるのである。だが、ここで少し胴部文様帶についても触れておこう。

さて、胴部の懸垂文についてであるが、施文上の違いから、隆帯によるものと沈線によるものの二者が検出されている。両者共にその採用段階から併存していたようであるが、岩の上21号住居跡、同23号住居跡（栗原1973）、西原29号住居跡（宮崎1972）等の類例からは、隆帯、沈線のいずれであろうとも、直線と蛇行線との組合せは認められず、それらは個別の文様として懸垂されていたこ

とがわかる。ただし、この段階の土器は口縁部、頸部、胴部という3分帯のものは少ないので、懸垂文を持つ例はいずれも3分帯構造の土器であり注意される。膳棚12号住居跡の土器はキャリバー部が省略された状態の器形（当遺跡の第3類に準ずる器形）を呈するが、こうした形態の土器は曾利I式土器に連動する要素があると考えられる。だが、懸垂文の採用段階については未だ不明な部分が多い。

直線と蛇行線が交互に整然と配置されるようになるのは、岩の上1号住居跡、同19号住居跡、木曾呂表3号住居跡（並木1978）、中山谷6号住居跡（新藤1971）等の段階をむかえてからと考えられる。この段階のキャリバー形の土器は頸部に画然とした無文帶を設けているものが圧倒的である。換言すれば、口縁部文様帶と胴部文様帶が明確に分離されている土器であると言えよう。懸垂文は隆帶が優勢で、沈線による場合はしばしば2本一対で描かれている。

このような隆帶による懸垂文の定着化も、まもなく沈線化へと変化していくようである。もともと隆帶には、それをなぞるような沈線が添えられていたのだが、初めのうちにはそうした土器から隆帶を除去しただけのような懸垂文が多くみられ、外観的な効果は隆帶のものに準じている。つまり、沈線による3本単位の直線と1～2本の蛇行線が組み合わさった例がそれである。半截竹管使用のものも比較的目につく。類例は、西原14号住居跡、同16号住居跡、狹山A1号住居跡（肥宿間1970）、二宮3号住居跡（村井1978）、平山橋4号住居跡（高林1974）、門田8号住居跡（八王子市門田遺跡調査会1976）、鶴川J17号住居跡（河野1972）、貫井南14号住居跡（安孫子1975）、鋼島園内1号住居跡（野本1980）等で出土している。子和清水遺跡（子和清水貝塚発掘調査団1978）からも多く検出されている。千葉県方面は沈線によるものが圧倒的ようである。この段階の土器は前段階にひきつづいて文様帶は3分帯構造のものが多いが、頸部の消滅化が進行している。隆帶による懸垂文の定着と頸部無文帶の設置には相関関係が窺われ、換言すれば、懸垂文の定着化は胴部文様帶の自立化の動きと呼応していたと言えよう。頸部無文帶の消滅と隆帶による懸垂文の衰微が一致していたのも当然なのであった。

それ後、懸垂文には沈線間への磨り消しという行為が加わり、また新たに磨り消し幅を広げていく傾向が芽生えてくる。磨り消し繩文も充填繩文へと変化を遂げる。具体的には、坂東山27号住居跡、花影9号住居跡、池田26号住居跡（佐々木1976）、恋ヶ窪2号住居跡（秋山1979）等のような土器へと変遷していくのである。これらの土器群へと到る経緯には連弧文土器という独自の土器構造を持つもの一枚加わり、土器の変容には地域差が増大する。いずれにしろ、この段階に到ると、懸垂文に直線と蛇行線を交互に配置するという原則に乱れが生じ、口縁部文様帶と共に分割軸の不安定化がもたらされる。そして、まもなく新たな構成原理に基づくモチーフが開拓されていくようになるのである。

だが、こうした胴部懸垂文の変遷には、上記のような図式化とは裏腹に、現実は、かなりの地域的な動向がからみ複雑である。埼玉県西～北西部についても、特に隆帶による懸垂文は、岩の上13号住居跡、鳥之上3号住居跡、坂東山27号住居跡の例を列挙するまでもなく、かなり新しい段階まで残存していることが指摘される。下南原遺跡でも隆帶の残存は顕著に認められる。地文への矢羽根状沈線や条線の施文、撲糸の残存等をも鑑みれば、地域性が明瞭に浮上してくるであろうことは

疑いない。一方、甲信地域の曾利式土器にも隆帶による直線や蛇行線の懸垂文が新しい土器群に到るまで盛行していたという事実があり、下南原遺跡を含む地域を理解するうえで参考となろう。

以上、この時期の土器群は極めて地域差が顕著にあらわれる為、整然かつ図式的に述べることは問題の解決につながらないことが予想された。そこで、今回は報告書という性格もあり、下南原遺跡出土土器群の全貌を浮き彫りにすることに努力を傾注し編年については概略で止めた。次回は、加曾利E I式と加曾利E II式土器の評価を軸にその間の経緯を明らかにしてみたい。谷井氏の加曾利E I式後葉直後の土器（谷井1979）、連弧文土器の展開と加曾利E式系土器群との関係などの重要項目については触れ得なかった。機会を改めたい。

（鈴木敏昭）

3. 繩文原体の観察

繩文中期土器の編年研究が進展する一方で、繩文原体に関する関心は今一步薄く、分析例をあまり聞かない。この研究は破片の一片一片を丹念に調べあげた上での統計的処理を必要とする為に、非常な時間と根気が要求される。従って、大規模調査に伴う膨大な資料の出土が、逆にこうした研究への取り組みを妨げていたのであろうと考えられる。発掘期間の割に整理期間が少なく、不満足なデータの集積しか望めないというのが現状では今後への展望は暗いと言わざるを得ない。

さて、下南原遺跡は発掘対象面積が少なく、しかも加曾利E II式期前葉の土器群がまとまって検出されたことから原体分析には好都合であった。反面、資料点数の貧弱さから、データとしては不満足な部分も指摘されるかも知れないが、傾向は明らかにし得るものと考えている。勿論、繩文の施文されている土器は全て分析の対象とした。

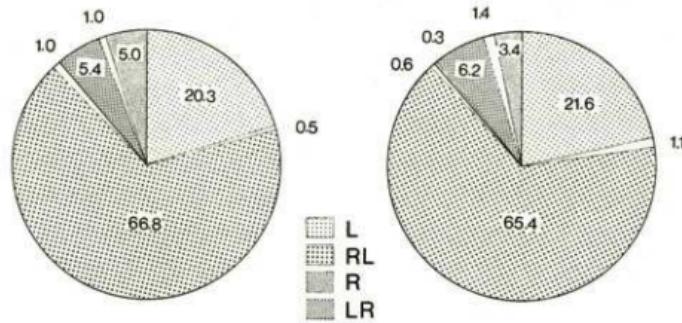
なお、本稿での繩文原体の表記法は、山内論文（山内1979）に準拠するが、0段の縄は省略し、1～3段の縄文はR、L、RL、LR、RLR、LRLのごとく簡略化して使用することにした。撚糸は⑧、①として略記する。

下南原遺跡からは撚糸が⑧、①の2種類、繩文がR、L、RL、LR、RLR、LRLの6種類の計8種類の原体が確認されている。それぞれの検出状況をグリッドごとの破片数で表わしたのが第2表である。円グラフは、表をより視覚的に表現する為に用意した。原体分析が可能であった破片総数は356点であったが、中でも4Cグリッドからは合計202点と全体の56.7%にあたる点数が出土しており、以後の分析は、主として全体と4Cグリッドを比較対照しながら進めることにする。

表によると、撚糸と繩文の比率は約1：3であり、全体では①と⑧の割合が6：1で、4Cグリッドでは4：1となっている。圧倒的に①撚りが多いとの結果が出ている。一方、繩文で最も多いのは2段の縄であり、全体の70%強を占める。わけてもRLの比率は高く、全体で65.4%、4Cグリッドで66.8%を占めている。1段の縄は少ない。また、3段の縄も僅少である。これらの原体を基本撚りでL系とR系に分けて調べてみると、全体ではL系が88.8%、R系が11.2%で、4CグリッドではL系が88.6%、R系が11.4%となっている。従って、下南原集落を営んでいた人達は、当該期においては少なくともL撚りを基本とした繩文原体を製作していたことが窺えよう。こうし

原体	グリッド	1 E	2 C	2 D	2 E	3 A	3 B	3 C	3 D	4 A	4 B	4 C	4 D	4C+3D	計 (%)
①		1	1	3	3	10		8	1	41		9		77 (21.6)	
L						2		1				1			4 (1.1)
RL		1	1	1	6	8	23	3	25	6	135	3	21	233 (65.4)	
LRL												2			2 (0.6)
②												10	2	12 (3.4)	
R						1		1		1		2			5 (1.4)
LR	1					1		2	1	2	1	11	3	22 (6.2)	
R LR								1							1 (0.3)
計		1	1	2	2	13	11	38	4	36	8	202	3	35	
(%)		(0.3)	(0.3)	(0.6)	(0.6)	(3.7)	(3.1)	(10.7)	(1.1)	(10.1)	(2.2)	(56.7)	(0.8)	(9.8)	356 (100)

第2表 グリッド別縄文原体検出一覧表



第30図 縄文原体組成円グラフ

た事実が、どのような時空に拡がりを示すかはデータの整備がなされていない現状では不明と言わざるを得ない。

ここで、施工工程等についても若干触れておこう。下南原遺跡出土の縄文土器は、L系を基本とした掘文等の施文後に、主たる文様が隆帯貼り付け、あるいは沈線によって描かれるのが普通である。そして、地文となる縄文等は上→下への回転施文が多く、それは口縁部についてもあてはまるものが多い。また、羽状縄文の土器も認められ、深谷市島之上遺跡(笠森1977)、大里郡岡部町水窪遺跡(栗原1976)との連動性が考えられる。埼玉県北西部方面においては、地文への矢羽根状沈線や集合条線の多用とも相俟って地域性が看取されよう。

なお、羽伏縄文の原体にはRLとLRの2種が併用されている。

(鈴木 敏昭)

4. 土器文様の解説へ向けての序

縄文土器は、中期に限らず、ほぼ器面全体にわたり文様が縦横に施されている。あたかも空白部を残すことに対する恐怖でもあるのかと疑える程、その執着心は強烈である。口唇上から土器の底面に到るまでが全てその対象となったこともある。だが、あくまで基本となるのは横方向への展開であった。一般的には、口縁部と胴部に文様帯が配されていると言えるのである。そして、それぞれの文様帯は、一方では依存しあいながらも独自性を有しており、内部においてはいくつかの文様単位が繰り返し展開されるのである。すなわち土器面に施される文様は、全てが縦・横の計画的な分割軸に則って、緻密に構成されていると判断されるのである。

我々はこうした縄文土器に、時には芸術的な美しさを感じる。だが同時に、何故、このような緻密な作業に労力と技術を傾けねばならなかったのか。何故、これほどの芸術作品が日常生活の中で使用されていたのか。また、何故、特定の芸術家ではなく、一般の人々に作り得たのか等々の疑問もまた湧出するのである。縄文土器とは、まさしく彼ら自身の反映としてあるのではないだろうか。我々は土器に編年の為の道具としての役割だけでなく、彼らの社会あるいは世界観を垣間見る為の窓として、つまり彼らの行動様式を知る為の媒介としての可能性を新たに付与すべきではないだろうか。

こうした問題意識の設定は<伝統的>で<科学的>な考古学からは拒否される傾向にあるのであろうが、偶々、下南原遺跡から3点の全体の文様構成がわかる土器が検出されたので、なにはともあれ、個々の土器を読み込んでみようと思う。

なお、第31図に示した土器文様の展開模式図1～3は、第20図の実測図1～3と同一の土器である。また図版6には各方向からの撮影写真が掲載されているので、併せて参照願いたい。

1. 4Cグリッドから発見された土器で、胴下半を欠く深鉢形土器である。口縁には山形の小突起が4単位配されている。つまり、外観的には4単位構成の土器であることが明示されているのである。文様帯は口縁部と胴部の2帯構成となっている。口縁部文様帯には小突起下と小突起間に配される大小2種類の渦巻文と渦巻文間の2個の枠状文が組み合わさって1単位文様が構成されており、それが4単位で器面をめぐり円環を閉じている。胴部文様帯には大小の渦巻文の直下から、1対の隆帯と蛇行隆帯が垂下されている。つまり、胴部文様帶においても基本的な分割軸は口縁部文様帯と同じ部分に当っていると言えよう。

だが、それだけの観察で済んでしまう程、縄文土器とは単純なものだろうか。否。以下に細部の検討をするが、説明の都合上、展開図の左から順に1～4と記号化しておく。完形としての実物で見れば、1と3、2と4は、それぞれが相対する部分に配置されているという<関係>にある。

まず、小渦巻文を検討しよう。渦の巻く方向と尾のびる方向は1～4のいずれも一致しているが、渦巻文の直上に施される刺突文は1と3には有り、2と4には無い。一方、小渦巻文下にくる蛇行隆帯も1と3、2と4に大別して考えられる。すなわち、前者の蛇行はその度合が緩やかで、後者は強い。そして、前者の隆帯には両側に沈線が添えられておらず、後者には添えられていると

いう相違点が明確に認められるのである。これを小渦巻文と蛇行隆帯との関係でいえば、刺突の付加された渦巻下には沈線が添えられずに蛇行の緩い隆帯が垂下され、刺突が伴わない渦巻下には沈線が添えられた屈曲の強い蛇行隆帯が垂下されていると言いかえることができる。それは、ある意味では1～4の各単位ごとの施文に費されるエネルギー量の総和はバランスが保たれているとでも言い得ようか。ともかく、以上から1と3、2と4は、それぞれが対称性を有するように文様帶内に分割配置されている事実が浮上してきた。

だが、ここで大渦巻文についても分析を加えねばなるまい。刺突が渦巻上に付加されるという点では小渦巻文と基本は同じである。ここで注意されるのは1、3に刺突が施されれば、当然2、4では刺突が省略されるはずなのに、2には刺突が配されるという点である。ここで2と4は対称性が破られているのである。

また、口唇直下の沈線は1～4内で自立的にひかれているべきなのだが、3のみ棒状文に連接させることで他と趣を変えている。さらに渦巻文上の刺突の数も1では大が7で小が4、3では大が6で小が3というように微妙に変えてある。刺突数が少ない部分での相違だけに、無意識的に違いが生じてしまったとは考え難い。全てが計画的であった可能性が高い。やはり、1と3の対称性は破られていたのである。

以上をまとめれば $\langle a + b + a' + b' \rangle$ ということになろうか、つまり、この土器は、一見、同じ形の単位文様が 360° の方向全体にわたって、連続して繰り返すことによって器面を一周するという、いわゆる並進対称性を有しているかのごとく観察されたが、細部の検討から \langle 対称性の破れ \rangle が隅々にまで計画的に具体化された構成体であることが明瞭となったのである。そして、最も外に向かって明示される口縁部においては、1カ所のみ他と違えることで、この土器の文様が円環を閉じることを否定しているのである。

2. 4Cグリッドに位置する第1号土壤から正位の状態で検出された。口縁に小突起が4単位配された深鉢形土器で、胴下半を欠く。文様は渦巻きを基調としたモチーフと内部に刺突列を充填させた長柄円形棒状文がセットとなって器面をめぐる。各単位文様を展開図の左から、それぞれ1～4と仮りに呼ぶことにする。

この土器も1の土器同様、口縁部の小突起から4単位構成であることが明示されている。だが、小突起下に位置する渦巻文（以下、上の渦巻文と略称する）の渦の巻く方向に着目すると1、2、4は左巻きだが、3に限って反対の右へ巻いていることがわかる。小突起の右斜め下に配されている渦巻文（以下、下の渦巻文と略称する）は全て左巻きである点をも考慮すると、3の右巻きは計画的な所産であることが窺えよう。

ところで、上下の渦巻文は互いに入組むことで一個のモチーフと化している。だが、その入組方にこの土器の構成原理が色濃く反映されているので順を追って見て行きたい。

まず、お互いの渦巻文の入組む度合についてであるが、2、3は上下共、單に渦巻きの尾が並列されるのみで止まるが、4、1は下の渦巻文が上の渦巻文に一部巻き込まれている。つまり、このレベルで考えると1・2、3・4のそれぞれの境界を通過するように土器が2分割されていることになる。

一方、下の渦巻文はそれをおおっている沈線との関係の仕方でも分割される。

1、2は渦巻をおおっている沈線が連続的に渦へと突入しているが、3、4では渦巻文と断絶関係にある。このレベルでの分割軸は第1点での渦巻文の入組む度合の場合とは丁度90度回転した位置に当る。

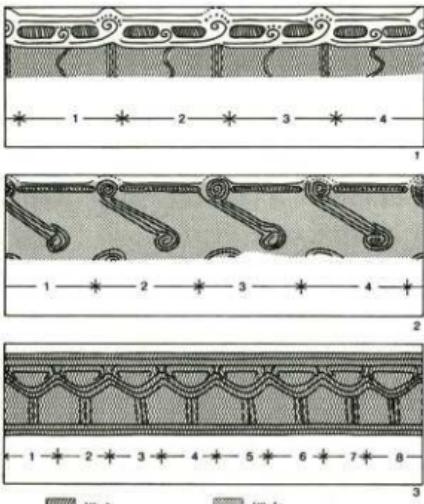
下の渦巻文をおおう沈線が1、2では途中で反転しながら連続的に渦巻文へと描かれていく点を見た。だが、その反転する位置が1では下の渦巻に近い部分にあり、2では上の渦巻に近く設けられている。3、4は下の渦巻とは連続的ではなく、切れているにもかかわらず、その切れる位置がそれぞれ2、1の場合と一致する。従って、この場合も結局2・3と4・1の関係に2分割されるのである。

まとめると、円環としてのこの土器は最も外示的である口縁部に1カ所、破れを用意しながら、文様構成における各レベルで90度のずれをもって、3回にわたった2分割が実現されていたと言える。従って、結果的には1～4は類似しながらも全てが異なる文様に仕上げられていたのである。記号化すれば $\langle a + a' + b' + b \rangle$ ということになろう。つまり、この土器も〈対称性の破れ〉を施文上の基本構造としていた事実が明白となったのである。

3. 第1号土壤から2と並んで正位の状態で検出された。胴下半を欠く深鉢形土器である。

この土器には突起や把手は無く、単位を明示する部分が認められない。數えれば、連弧が8単位整然と配置されてはいるのだが、図版6の写真でも窺えるように、外観を一見しただけでは連弧の数は不明瞭なのである。つまり、この土器は上記した1、2とは文様を施文するうえでの意識が異なっていると言えよう。また、文様帯を頬部にめぐらせた3本沈線で分帶する点も1、2にはみられない。

ただ、良く観察すると、連弧から垂下する3本沈線が5～8の分割部においては部分的に4本になっており注意される。この土器には3本沈線を基調にしたモチーフが施文されているのだが、その沈線は半截竹管によっている。つまり、3本沈線を作出するということは中央の1本をだぶらせるように2回にわたり平行沈線を描くということであり、3本であるべき沈線が4本化しているということは、よりもなおさず、乱れた半截竹管の重ねをしているということを意味する。ここで問題となるのは5～8の部分に限って4本化しているのは単なる偶然か否かという点である。1～4がきっちとした3本であるにもかかわらず、その相対する位置にある5～8が乱れているというの



第31図 下南原遺跡出土土器（第20図1～3）展開模式図

は極めて示唆的であり、1、2の土器を分析した今となっては、土器製作者の意図を感じざるえない。勿論、表・裏という意識の違いから、たまたま5～8に関しては雑な施文になってしまったものとも考えられるが。記号化すれば<a+a+a+a+a'+a'+a'+a'>ということになろう。

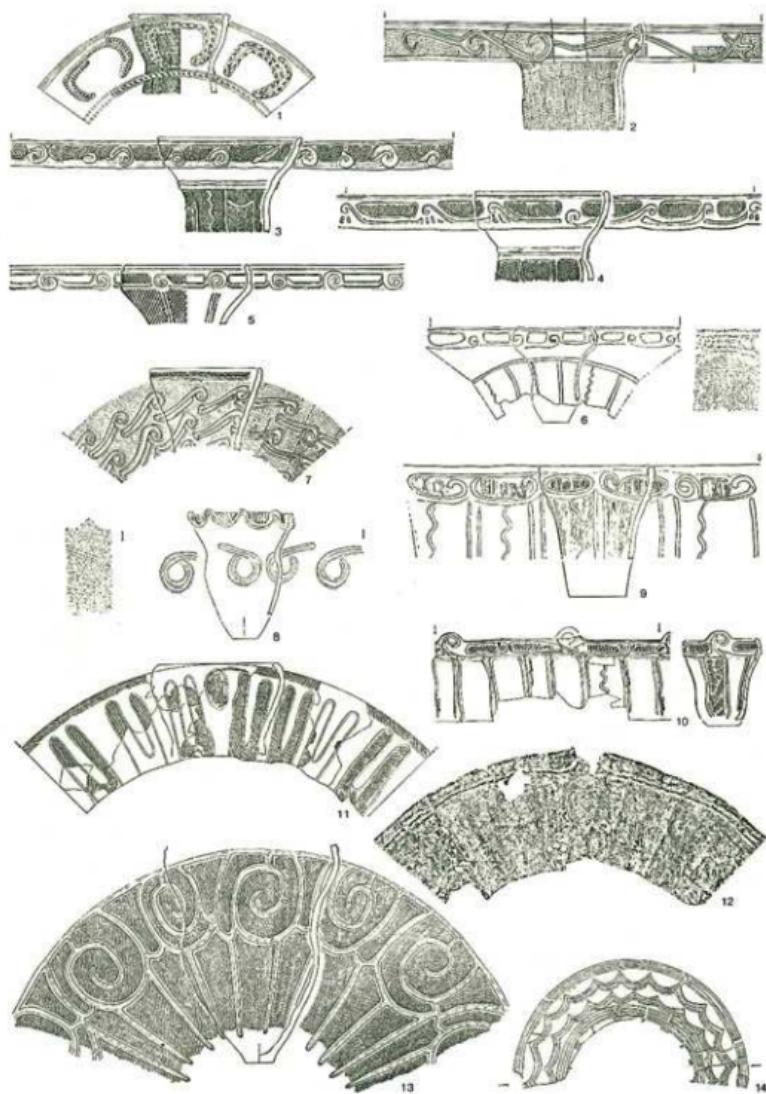
以上のように、下南原遺跡出土の3点の土器は分析された。これらをまとめて断章化すると以下のとくになる。

- ① 同一の単位文様がくりかえし器面を一周すると今まで考えられていた加曾利E式土器も展開図の検討から、そう単純には断定できないことが明瞭となった。
- ② 同じ単位文様をくりかえすことで円環が閉じられることを拒絶する部分が用意される。土器の正面観とも関係してこよう。
- ③ 土器には一定方向からの視線を意識して全体的な文様の配置関係が決定された可能性がある。
- ④ 土器面に施された文様は複数単位に分割されているが、偶数単位の場合には相対する部分に当っている文様を意識的に遠える傾向にある。だが、分割された各単位ごとの施文に要するエネルギーの総和は、一部位を除き、ほぼ一定化している。
- ⑤ 上記した点を一言で要約すれば、これらの土器は<対称性の破れ>を施文上の基本原理としていたと言える。
- ⑥ 連弧文土器は3本沈線に象徴されるように3にこだわりを持っているように考えられるが、反面、全体的には単位性を潜在化させた構成体となっている。

ところで、第32図に加曾利E式土器を中心とした土器の展開図を集成しておいたが、それらと比較対照すれば明らかなように、下南原遺跡出土の土器群は一般的な加曾利E式土器の施文構造と一致している事実が指摘されよう。すなち、上記した断章は加曾利E式土器の基本構造の列記でもあると換言し得るのではないかと私考している。さらに<対称性の破れ>は加曾利E式土器だけにとどまらず、前期前半、具体的には諸磯式土器周辺にまでさかのぼり得るのでないだろうかとも密かに考えている(鈴木1980)。勝坂式土器を反対称(谷井1979)、あるいは3=2+1(嶋崎1979)と認識した視点も、以上の基本原理にとり込まれる可能性がある。越後新潟の火炎土器(小林1981、金子1981)に関しても例外ではなさうである。

このように、管見に触れた資料の検討からは、こうした原理が時・空を超えて、かなり拡がることが予想される。つまり、縄文人の土器に施文をするうえでの基本原理一分類・論理体系・世界観は一定の地域、時代においては顕在化していて可能性がある。つまり、こうした原理が根強く認められるということは、各種遺構等、さらにそれらの集落内での配置関係にも全く影響が及ぼされなかつたとは断言し難くなったということを意味しよう。むしろ、集落の空間構成にも一脈通じる面が窺えるようになるのではないかとさえ期待されるのである。だが、現状では全体的に土器の展開図が僅少であり、これ以上は不分明と言わざるをえない。

単に土器は編年のみだけにあるのではなく、いかに文様相互の配置関係のわかる展開図が必要かという点だけでも、ここでは指摘したかとは考えるが、自分自身への今後の課題の方が山積みてしまった。つまり、今後は豊富な展開図の集成と分析を実践しながら縄文土器の基本構造をさら



第32図 各遺跡出土土器の展開図集成 1(西原)、2・7・13(花影)、3・4(坂東山)、(鶴川J)、
6(西野)、8(平山橋)、9(金堀沢)、10・14(恋ヶ窪)、11(小室天神前)、12(前原)

に明確にしていきたい。同時に、土器は地域差、時間差を反映する点も事実であり、それは土器構造のどのレベルでの問題となるのかをも検討していきたい。こうした作業は当然、現行の型式論あるいは様式論と低歟することになるであろう。

(鈴木敏昭)

5. <打製石斧>について

打製石斧の諸々の考察にはいる前に一応付記しておきたい点がある。それは、今回の調査において得られた資料総数が欠損品をも含めて総数19点と極めて微量であったという事実である。従って以下で検討される事項の多くには、相当の限界も、またついてまわっていることは否定できない。だが、傾向だけでも指摘し得たならば本稿の役割は完了するものと考え、若干の無理は承知で認めることにした。

それでは、打製石斧についての若干の考えをまとめてみたいと思う。打製石斧は、いったいどのようにして、そして何に使われたのであろうか。しばしば打製石斧の多量の存在をもって農耕が行われたひとつの証拠とする意見を耳にする。つまり、彼らにとって、打製石斧は鍬なのである。また縄文中期農耕の否定論者は植物質食料の採集、あるいは堅穴住居の構築等の際に使用する土掘り具であるとの見解を披瀝しているようである。だが、打製石斧が土掘り具であるとする点では、両者とも共通しており、問題を複雑にしている。ある意味では、農耕を肯定するか否かという信念が、石器の機能を決定づけているようにさえ見受けられるのである。従って、ここでは農耕の存否に関しては一定の距離を保ち、できるだけ石器そのものを見つめるように努力してみたいと考える。

さて、現状では、打製石斧が土掘り具であるとする意見が大勢を占めている。一見、疑問の余地がないかのごとく考えられているのであるが、果たして如何であろう。打製石斧を見て、どうも土を掘る道具としては適さないのではないかと感じるのは筆者だけなのであろうか。中には、大きさ、形状からいって全く不適と思われるものがかなり存在するのである。とりわけ、一方の意見としてある堅穴住居を掘る場合には殆んど不適であろう。なぜなら、ロームのような粘性の強い対象物では石器にこびりついてしまい、掘るにしても相当な困難が予想されるからである。また反面、当遺跡のように粘性は無くても疎泥りの砂利層では、やはり難しいと言わざるをえない。打製石斧が土掘り具として有効なのはサラサラした感じであまり粘性のない土を対象とした場合ぐらいであろう。しかし、打製石斧よりもさらに有効な道具は他になかったのだろうか。今日残存していないとは言え、木もしくは竹の掘り棒を想定することは困難であろうか。そのような考えを裏付ける実験データが公表されているので少し触れたい(藤森1970)。それによると打製石斧を柄につけて掘る場合と、棒で掘る場合では、後者は前者の半分以下の労力ですむという(ただし、土の扱き出しは手で行った場合である)。貴重な事実の集積であり、こうした観察は素直に受け入れておきたい。

次に名称の起りである伐採具としての可能性について検討してみたい。この点に関しても藤森氏による実験データ(藤森1970)が参考になろう。氏らは、大形で、刃が厚く、頑丈で幅広の打製石斧を使用しており、それによると直径10cmもある栗の立木さえもう分で切断したという。つま

石器番号	出土位置	石器名	現存長(cm)	最大幅(cm)	頭部幅(cm)	脣部幅(cm)	刃部幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
1	1号 住居跡	打製石斧	9.5	4.6	4.0	4.1	4.6	1.7	87	硬砂岩 石墨 片岩
2	1号 住居跡	打製石斧	12.6	4.6	0.9	3.9	4.6	1.6	94	
3	1号 住居跡	打製石斧	6.2	3.1	1.7	3.1	—	1.0	21	頁岩
4	13号 土壙	打製石斧	8.5	5.4	3.1	4.3	5.4	2.1	91	硬砂岩 石墨 片岩
5	14号 土壙	打製石斧	11.9	5.1	2.8	3.2	5.1	2.1	146	
6	15号 土壙	礫器	16.3	10.9	—	—	—	5.4	1082	硬砂岩
7	15号 土壙	敲石	21.1	13.2	—	—	—	4.0	—	閃綠岩
8	19号 土壙	打製石斧	8.6	4.6	3.2	4.3	4.6	1.7	72	頁岩
9	19号 土壙	剝片	6.4	4.3	—	—	—	1.0	26.1	ホルンフェルス
10	1-Cグリッド	打製石斧	10.2	5.2	4.9	4.6	5.2	1.6	117	頁岩
11	1-Cグリッド	使用痕のある剝片	7.5	6.0	—	—	—	3.5	135	チャート ホルンフェルス
12	1-Eグリッド	打製石斧	9.3	5.7	5.3	5.7	—	2.4	171	
13	2-Dグリッド	打製石斧	9.9	4.7	3.5	3.9	4.7	2.6	151	石墨 片岩
14	2-Eグリッド	打製石斧	8.9	4.8	3.0	4.2	4.8	1.8	113	頁岩
15	3-Dグリッド	打製石斧	9.2	5.7	5.6	4.8	5.7	2.2	137	閃綠岩
16	4-Cグリッド	打製石斧	7.7	4.9	2.6	3.7	4.9	1.4	49	頁岩
17	4-Cグリッド	打製石斧	9.0	9.2	8.1	4.8	9.2	1.8	178	硬砂岩
18	4-Cグリッド	打製石斧	11.1	6.2	5.3	4.8	6.2	1.9	160	硬砂岩
19	4-Cグリッド	打製石斧	16.8	9.4	8.4	5.3	9.4	3.7	521	硬砂岩
20	4-Cグリッド	打製石斧	10.4	5.6	4.5	4.6	5.6	2.9	173	ホルンフェルス
21	4-Cグリッド	打製石斧	5.2	7.3	—	—	7.3	2.9	88	硬砂岩
22	1号 住居跡	石鎚	2.2	1.8	—	—	—	0.6	1.9	チャート
23	13号 土壙	剝片	2.9	2.8	—	—	—	0.7	3.0	黒耀石
24	15号 土壙	石核	2.8	2.1	—	—	—	1.2	5.9	チャート
25	3-Aグリッド	剝片	5.1	3.0	—	—	—	2.1	10.4	頁岩
26	3-Aグリッド	剝片	2.9	3.7	—	—	—	1.3	14.9	頁岩
27	4-Cグリッド	剝片	1.5	0.9	—	—	—	0.3	0.25	黒耀石
28	4-Cグリッド	剝片	1.6	1.6	—	—	—	0.5	0.9	黒耀石
29	4-Cグリッド	剝片	2.8	1.7	—	—	—	0.9	2.4	黒耀石
30	4-Cグリッド	剝片	3.6	2.6	—	—	—	0.9	6.5	チャート
31	4-Cグリッド	剝片	5.1	4.1	—	—	—	1.6	28.0	頁岩
32	4-Cグリッド	剝片	4.9	2.8	—	—	—	1.8	20.5	チャート
33	調査区外	使用痕のある剝片	2.9	3.9	—	—	—	2.1	18.8	黒耀石
34	調査区外	打製石斧	9.5	4.7	3.9	4.7	4.7	2.0	119	硬砂岩
35	調査区外	打製石斧	10.0	4.8	3.7	4.0	4.8	1.8	115	硬砂岩
36	調査区外	敲石	11.0	7.9	—	—	—	4.2	523	閃綠岩

第3表 石器計測表

形 態 自然面	I 類		II 類				III 類		計
	a	b	a	b	c	d	a	b	
片 面 全 部			2	1			2	3	9
片 面 $\frac{1}{2}$	1	2							3
片 面 $\frac{1}{4}$	2				1				3
片 面 一 部		1							1
両 面 に わ た る								1	1
自 然 面 無		1						1	2
計	3	4	2	1	1	2	3	3	19

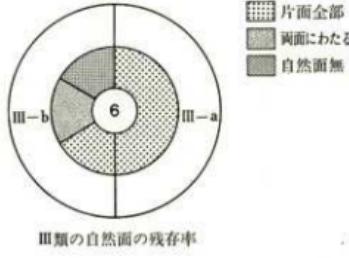
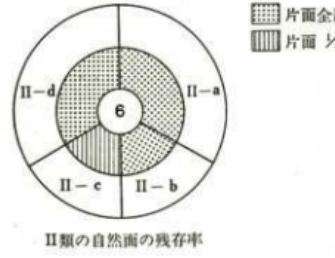
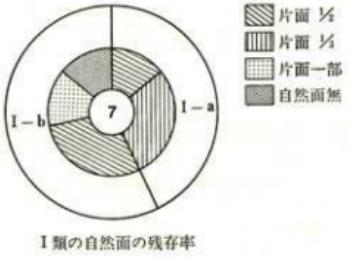
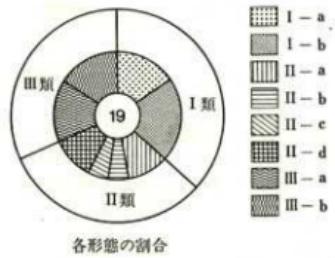
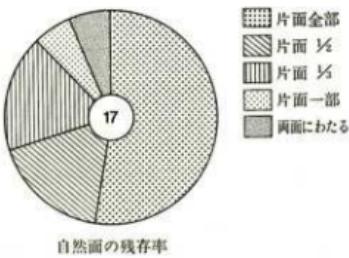
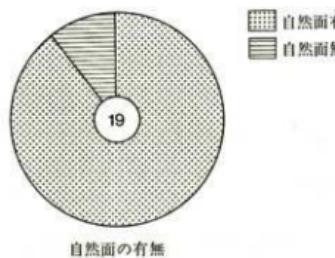
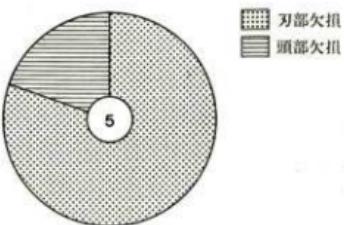
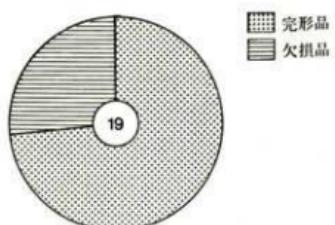
第4表 形態と自然面

り、木を切ることは可能なのである。だが、一般的な打製石斧についてまで普遍化することは難しいのではなかろうか。せいぜい枝をおろす程度のことまでであろう。それとて、現実には、使用痕を見れば明らかなように、伐採具として用いられた形跡を搜しだすことは難かしい。やはり、刃部の磨耗等は土との接触を考える方がいいのではなかろうか。

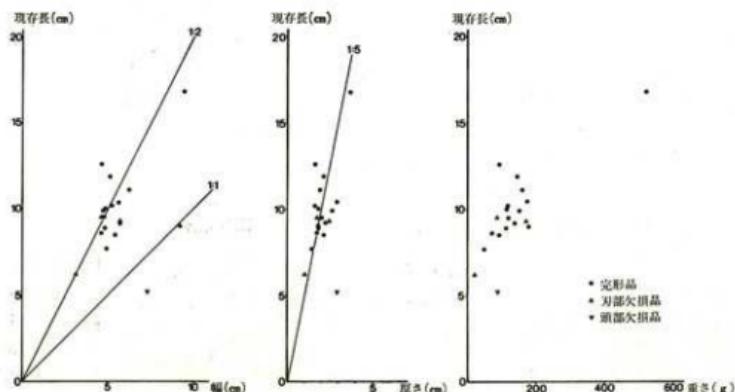
ここで、打製石斧の用途に関する一定の見通しを得る為に、もう少し使用痕について見ておきたいと思う。第1に全面に同じようにつく例はほとんど無い。第2に片面の下半部、とくに刃部に近い部分に多く残される。第3に刃部に向かって斜めに偏つてつく例が多い。簡単にまとめれば以上の3点に要約できよう。また、自然面を片面に残す例が圧倒的に多い点は当遺跡でもその例外ではなかった。つまり、原石の彎曲がそのまま残されているのである。その面にむしろ使用痕跡は多く見受けられ、そうした原石の彎曲を保存するような意識的行為が加えられたのであると推察される。つまり、自然面を残すということは用途と何らかの関連性を有する行為であったと評価されるのである。我々はここで、打製石斧の用途に関して、除草具としての可能性を打製石鋤論に対するアンチテーゼとして、ささやかに提起しておこうと思う(註1)。勿論、打製石斧には各種の大きさ、形状があり、全てについてあてはまるかどうかは今後の問題であることも肝に銘じておきたい。

さて、除草具としては、柄をつけた場合、手で直接持つて使用する場合の両者が考えられるが、一概に断定し難い。両側縁に顯著に見られる調整等も、柄の装着の為ばかりとは考えられない節もある。中には手になじみ易い形のものも多く存在するのである。除草具=鎌という現代的な連想が働くが、草を除くのが目的である以上直刃を有する必要性は薄く、むしろ、抜根に対し強い形態を有する方が優先すると考えられる。こうして再び打製石斧を眺め直してみると、除草具としての形状を充分に見えていることが認識される。山野での雑草類の繁茂、成長は著しいものがあろう。集落自体も油断をすれば、たちまち雑草におおわれるであろうことは想像に難くない。大量の除草具は常に要求されていたのである(註2)。

ところで、小林公明・武藤雄六氏を中心に行なった打製石器の分析・見直し作業が継続、実践されている(小林1977、武藤・小林1978)。氏らの作業は、従来安易に眺めていた石器を農作業の各種段階に即応する農耕具として再評価しようとするものであり、定説を盲信する人々に対する警鐘としても注目されてよい。その中で小林氏は、打製石器のあるものを草取鎌として分類している。すなわち



第33図 打製石斧の諸属性円グラフ



第34図 打製石斧形状相関図

氏は、ほぼ直刃を有する從来の縦型石匙をこれにあてたのである。個別石器に関しての批判云々は本稿の意図ではなく略すが、小林氏等の仕事も体系的なものである以上、もうしばらく静観したいと思う。いざれ検討の機会が訪れればと願うものである。

(松村和男)

註1 台湾の東南洋上の紅頭族ヤミ族は焼烟農業を行うが、その際に、日本の打製石斧に似た石器を1938年ごろまで使用していたということで有名である。彼らが使っていた打製石斧はピーラスまたはチチヅチブと呼ばれ、日本の縄文時代の分銅形のものに極めてよく似ている。それは柄をつけずに手で握り、畑地を開墾する際に草（とくに萱など）の根を打ち切り、取り除くのに用いられていたという。珪質砂岩製の方角状片刃の打製石斧は柄をつけ、手斧のようにして、これもまた開墾の際に萱の根を除くのに用いられていたという。そして、実際に、焼烟農耕に使っていたのかカリと呼ばれる振棒である。きれいな彫刻を施したものばババゴトと呼ばれ、祭祀のときに使用する水芋の取扱に用いられるそうである。また、他の東南アジアやオセアニアなどの熱帯地域の場合でも振棒は種を蒔いたり、植物を植えたりする穴を土地にあけるためなどに用いられているようである。

註2 焼烟農耕の移動の要因は一般的説明によるととくに地力が衰えた為だと言われるが、最も焼烟の継続を困難にする原因是、雑草の繁茂である。焼烟における最も重要で、労力のかかる仕事は除草なのである。九州山地では、6月中旬から7月中旬に「一番草」、8月上旬から9月上旬に「二番草」といって年2回除草を行いうが、二回目の方はとくに手間がかかるそうである。それでも、畑地は毎年約10~20%雑草により狭められ、4年目の耕地で1年目の半分以下になってしまうそうである。これほど雑草の力というものには強いものがある。仮りに、縄文時代に焼烟農耕があったとしても、やはり雑草が最大の敵であったことは疑いないであろう。

引用・参考文献

- 秋山道生ほか 1979「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ」国分寺市教育委員会
秋山道生ほか 1980「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ」国分寺市教育委員会
安孫子昭二ほか 1969「多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅳ」多摩ニュータウン遺跡調査会
安孫子昭二・小田静夫ほか 1975「貫井南」小金井市貫井南遺跡調査会
飯田充堵 1981「第4次調査藤原遺跡」所沢市文化財調査報告書第5集
石坂茂・原雅信 1979「加曾利E式土器の繩紋原体について一群馬鹿前橋市上川久保遺跡出土の土器を中心として」なわ第17号
伊藤富治夫ほか 1976「前原遺跡(Ⅰ)」国際基督教大学考古学研究センター
梅沢太久夫 1973「大里郡寄居町東遺跡発掘調査報告一埋甕等を伴う配石造構」埼玉考古第11号
梅沢太久夫 1980「江光山」考古学資料刊行会
梅沢太久夫ほか 1980「舟山遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査報告書第9集
岡本東三 1982「石蒸し料理法」日本の美術No189 繩文時代 I
小田静夫 1976「繩文中期の打製石斧」どるめん第10号
奥田誠・岡田謙・野村陽一郎 1941「紅頭楓ヤミ族の農業」大南洋・文化と農業
柿沼幹夫 1979「埼玉県北部における繩文遺跡の立地について」埼玉考古第18号
金井琢良一 1969「平松台遺跡」
神奈川考古同人会 1980・1981「シンボジウム繩文時代中期後半の諸問題とくに加曾利E式と曾利式土器との関係について」神奈川考古第10号・第11号
金子拓男 1981「火焰土器」縄文文化の研究Ⅲ 雄山閣
鹿野忠雄 1946「紅頭楓ヤミ族と石器」東南亞細亞民族学先史学研究 矢島書房
桐生直彦 1981「連弧文土器」縄文文化の研究Ⅲ 雄山閣
栗原文藏ほか 1959「吹上貝塚」大和町のむかし郷土資料第3集
栗原文藏 1973「岩の上・雄子山」埼玉県遺跡発掘調査会報告書第1集
栗原文藏 1976「水窪・新井遺跡の調査」埼玉県大里郡岡部町教育委員会
栗原文藏・佐藤忠雄 1977「水窪遺跡の調査—第二次—」埼玉県大里郡岡部町教育委員会
小林公明 1977「縄文中期八ヶ岳南麓における農具としての石器」信濃24-4
小林達雄 1981「越後新潟火炎土器のクニ」月刊文化財8 No.215
子和清水貝塚発掘調査団 1978「子和清水貝塚—遺物図版—」松戸市文化財調査報告第8集
河野 実 1972「鶴川遺跡群」地点 東京都町田市鶴川遺跡群調査団
埼玉県教育委員会 1975「埼玉県遺跡地名表—史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在台帳」
埼玉大学考古学研究会 1970「勝瀬」風塵7号
板詰秀一 1965「新座」吉川弘文館
佐々木高明 1962・1963「南九州山村の焼畑経営」立命館文学210・211号
佐々木高明 1971「稻作以前」日本放送出版協会
佐々木保俊 1976「池田遺跡発掘調査報告書」新座市埋蔵文化財報告第II集
佐々木保俊 1979「唐沢遺跡」富士見市遺跡調査会調査報告書第1集
佐々木保俊 1979「松ノ木遺跡」富士見市遺跡調査会調査報告書第2集
佐々木保俊 1979「松ノ木遺跡」富士見市遺跡調査会調査報告書第3集
佐々木紀子 1975「巣山」小金井市文化財調査報告書4
笠森健一ほか 1976「志久遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第31集
笠森健一・柿沼幹夫ほか 1977「前島・島之上・出口・芝山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集
式 正英 1964「土地分類基本調査 地形調査 寄居」経済企画庁
鵜崎弘之ほか 1979「ハケ遺跡C地区」上福岡市ハケ遺跡調査会
白石浩之 1978「加曾利E式土器の変遷」考古学研究25-1
新藤康夫ほか 1971「中山谷」小金井市文化財調査報告書1
新藤康夫 1976「加曾利E式土器細分の再検討」考古学雑誌62-3

- 末木 健 1981「曾利式土器」縄文文化の研究Ⅲ 雄山閣
- 杉山博久 1977「愛名島山遺跡の『焼石炉』をめぐって一類例遺構の集成とその分析ー」小田原城内高等学校図書館紀要創刊号
- 鈴木敏昭 1980「諸磯b式土器の構造とその変遷(再考)」土曜考古第2号
- 高林 均ほか 1974「平山橋遺跡」東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会
- 高山 純 1974「大磯・石神台配石遺構発掘報告書」大磯町教育委員会
- 高山 純 1976・1977「配石遺構に伴出する焼けた骨頭の有する意義(上・下)」史学46-4、47-1
- 田中 信はか 1981「小室天神前遺跡」伊奈町天神前遺跡調査会
- 谷井 鮎 1970「内畠遺跡発掘調査報告」埼玉県遺跡調査会報告第7集
- 谷井 鮎 1974「坂東山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第2集
- 谷井 鮎 1974「南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影」埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集
- 谷井 鮎 1976「鶴ヶ丘」埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集
- 谷井 鮎 1979「縄文土器の単位とその意味(上・下)」古代文化31-2・3
- 谷井 鮎 1979「加曾利E II式土器の覚書」埼玉県立博物館紀要5
- 戸沢充則 1979「縄文農耕論」日本考古学を学ぶ2 有斐閣
- 戸田哲也 1981「加曾利E式土器後半期の縄文原体」小田原考古学研究会会報第10号
- 並木 隆 1978「甘粕原・ゴンゾ・露葉子遺跡—国道254号バイパス建設用地に係る埋蔵文化財発掘調査ー」埼玉県遺跡調査会報告書第35集
- 並木 隆 1978「木曾呂表遺跡」川口市文化財調査報告書第9集
- 中島 宏 1977「金堀沢遺跡」入間市金堀沢遺跡調査会
- 新津 茂ほか 1980「六仙遺跡」東久留米市教育委員会
- 日本考古学協会 1981「北関東を中心とする縄文中期の諸問題<資料>」
- 丹羽 茂 1981「大木式土器」縄文文化の研究Ⅲ 雄山閣
- 能登 健 1975「縄文文化解明における地域研究のあり方—関東地方加曾利E式土器を中心としてー」信濃27
— 4
- 能登 健・石坂 茂 1980「重弧文土器の系譜」信濃32-4
- 野中松夫 1980「八番遺跡」蓮田市文化財調査報告書第1集
- 野村陽一郎 1969「紅頭蝮ヤミ族の経済的および社会的構造に関する研究」岐阜大学農学部農業経済学研究室
研究業績第1号
- 野本孝明ほか 1980「網島園内遺跡」大田区の埋蔵文化財1
- 橋本 勉ほか 1976「ミシマ遺跡」豊郷町遺跡群I
- 八王子市門田遺跡調査会 1976「門田遺跡群一年度調査概報ー」
- 花園 村 1979「花園村の今昔」
- 肥留間博ほか 1970「狭山・六道山・浅間谷遺跡」東京都瑞穂町文化財調査報告I
- 福島那男 1979「望月町下吹上遺跡の打製石斧」研究ノート3 地域研究の方向 千曲川水系古代文化研究所
- 藤森栄一 1965「井戸尻遺跡」中央公論美術出版
- 藤森栄一 1970「縄文農耕」学生社
- 堀口萬吉 1975「日隈の地学 I 新・埼玉の地質をめぐって」策地書館
- 増子康真 1978「縄文中期後半土器の編年—東海地方西部地域ー」古代人34
- 宮崎朝雄ほか 1972「加倉・西原・馬込・平林寺」埼玉県遺跡調査会報告第14集
- 宮崎朝雄 1979「加曾利E式土器について—埼玉県出土器を中心としてー」なわ第17号
- 宮野和明ほか 1975「西原・大塚遺跡発掘調査報告」志木市の文化財第4集
- 武藤雄六・小林公明ほか 1978「曾利」長野県富士見町教育委員会
- 村井美子ほか 1978「二宮遺跡」秋川市埋蔵文化財調査報告書第5集
- 山内清男 1940「第K種 加曾利E式」日本先史土器図譜
- 山内清男 1979「日本先史土器の縄紋」先史考古学会
- 横山悦枝ほか 1974「北八王子・西野遺跡」東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会

(全稿了 '82.3.3)

写 真 図 版

道路全景および土層 (B-B')





第1号住居跡・第7号土壤



第1号土壤



第1号土壤



第1号土壤



第1号土壤



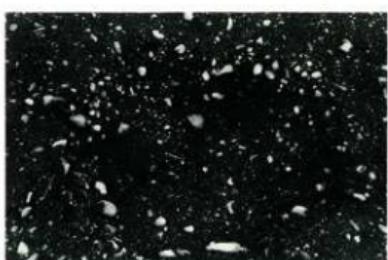
第 2 号土壤



第 3 号土壤



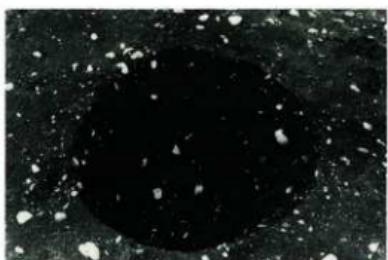
第 3 号土壤



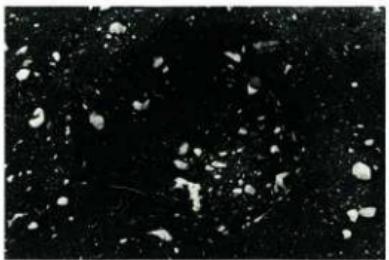
第 4 号土壤



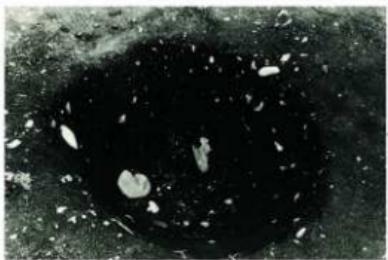
第 5 号土壤



第 6 号土壤



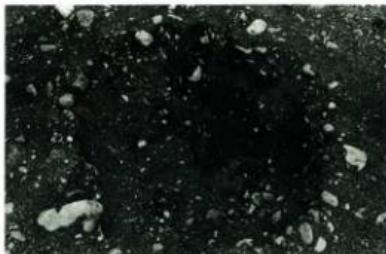
第 8 号土壤



第 9 号土壤



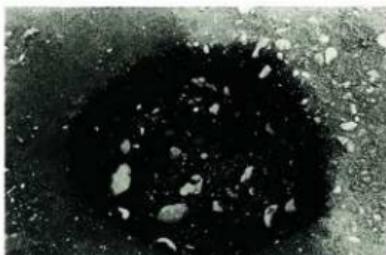
第10号土壤



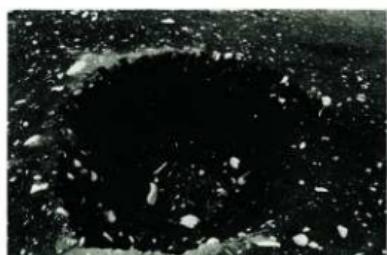
第11号土壤



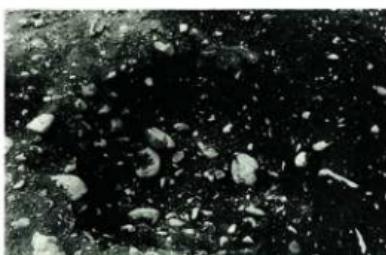
第12号土壤



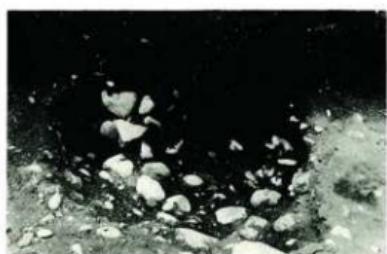
第13号土壤



第14号土壤



第15号土壤



第16号土壤



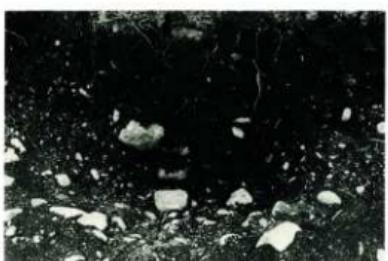
第17号土壤



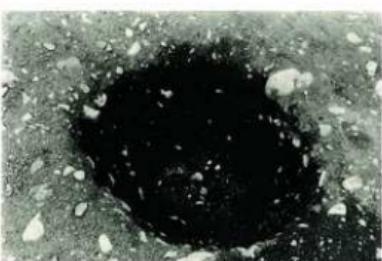
第18号土壤



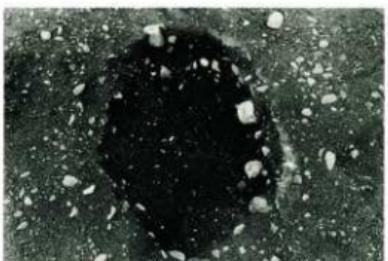
第19号土壤



第20号土壤



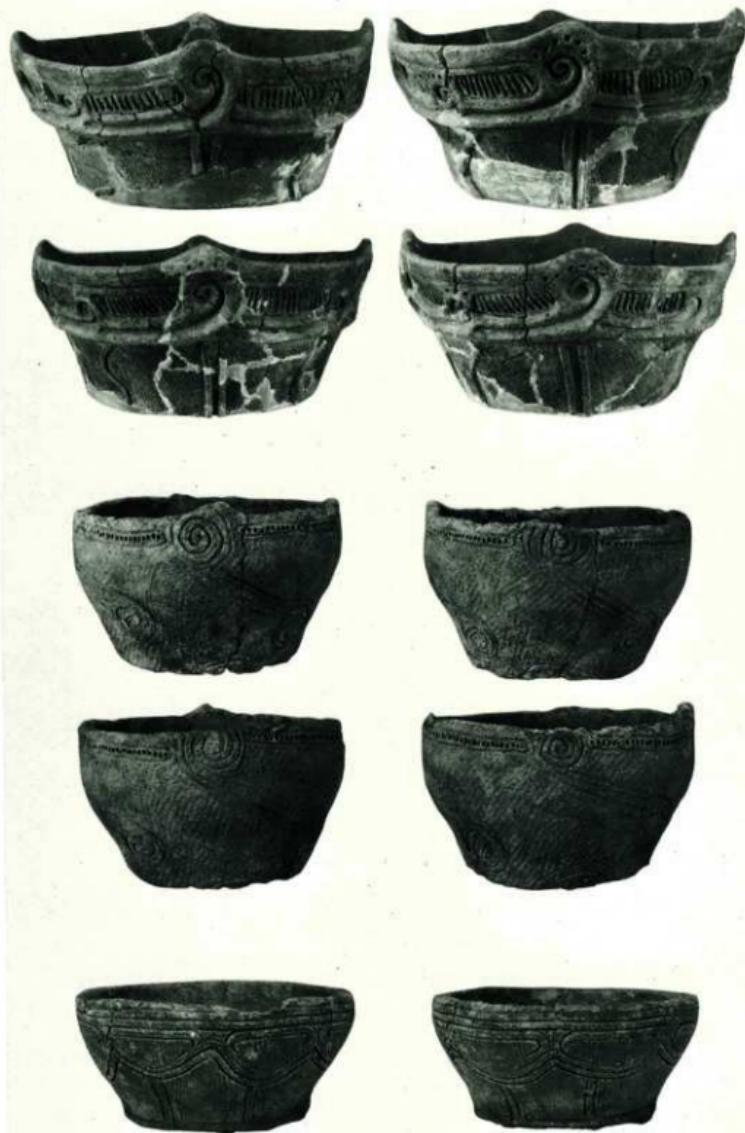
第21号土壤



第22号土壤



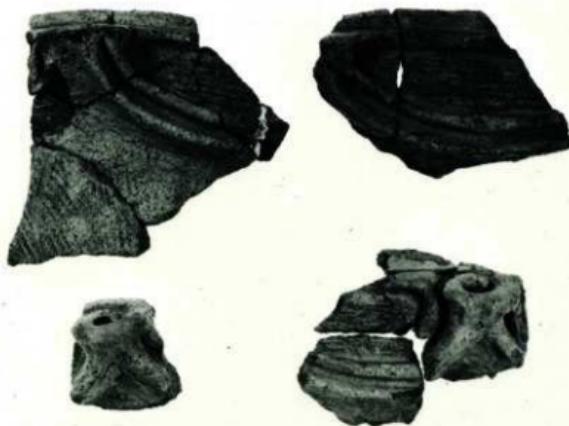
第23号土壤



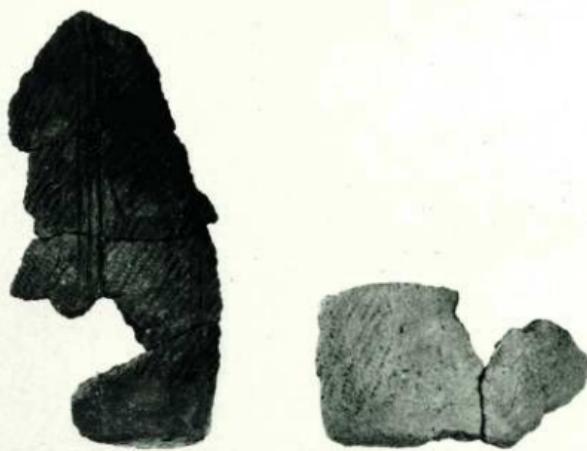
土器 (1)



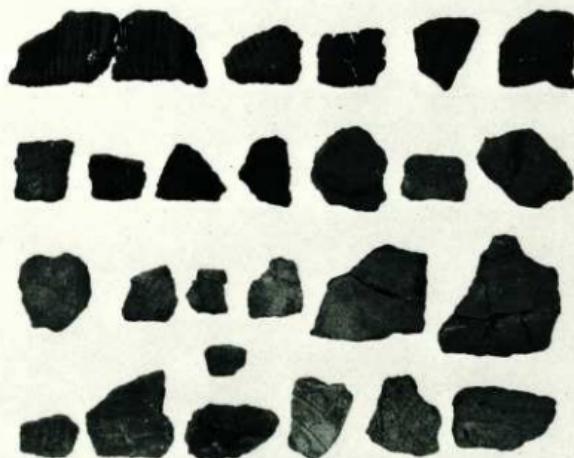
土 器 (2)



土 器 (3)



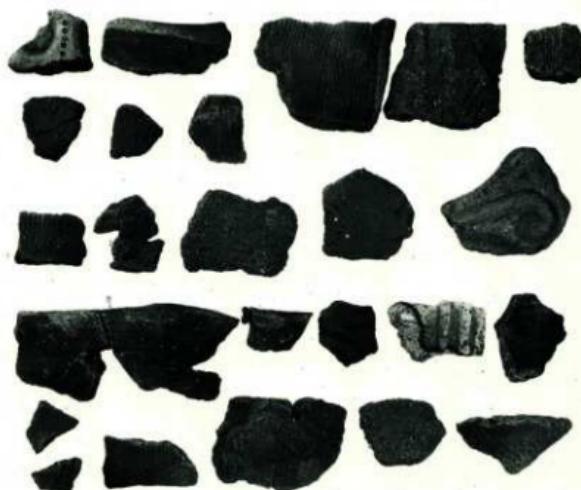
土 器 (4)



遺構出土土器 (1)



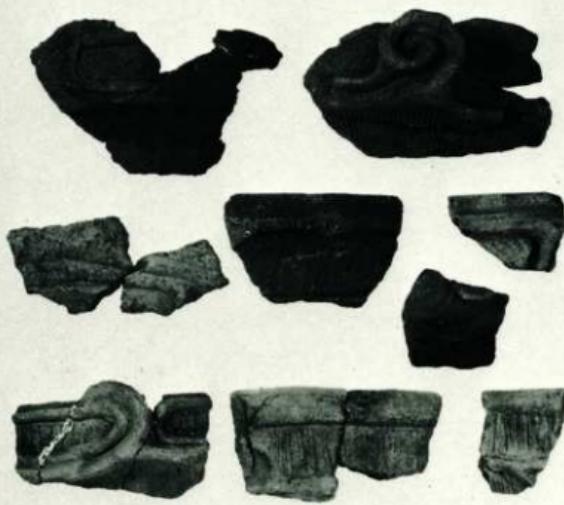
遺構出土土器 (2)



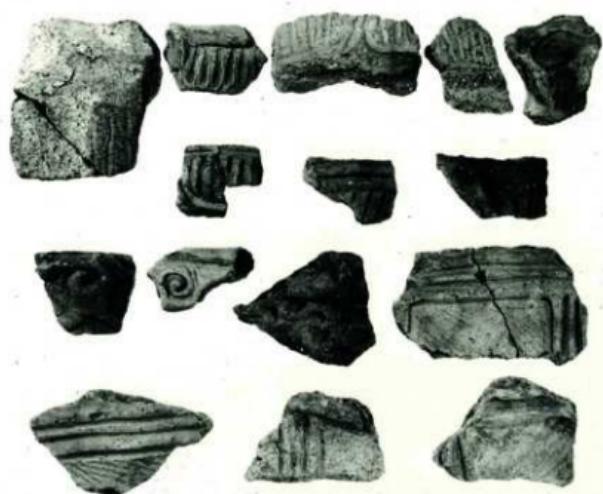
遺構出土土器 (3)



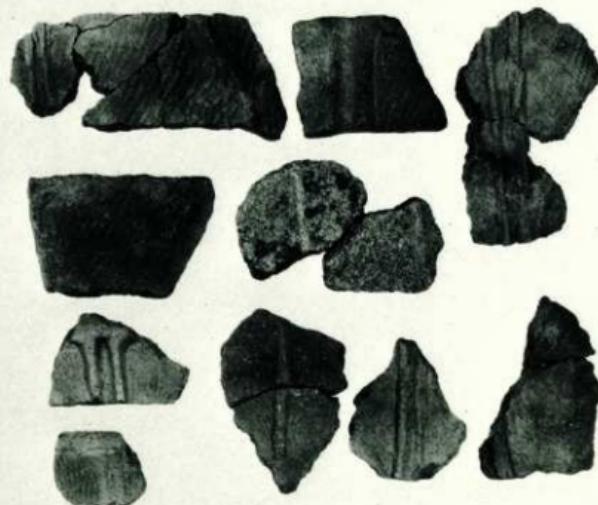
遺構出土土器（4）



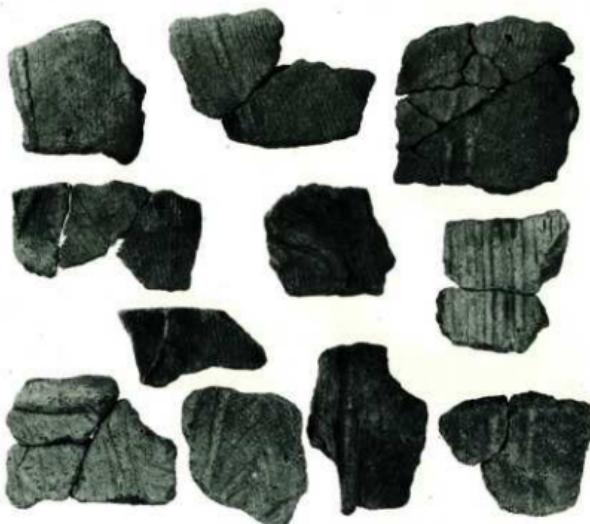
グリッド出土土器（1）



グリッド出土土器（2）



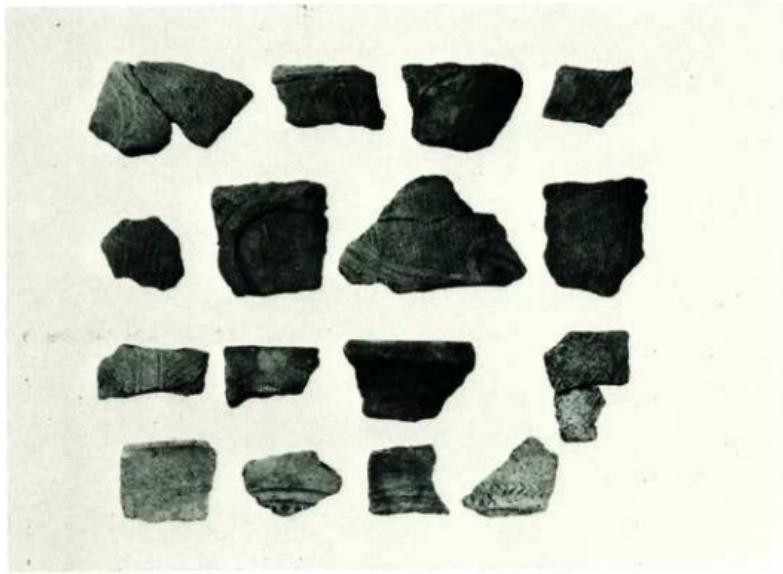
グリッド出土土器（3）



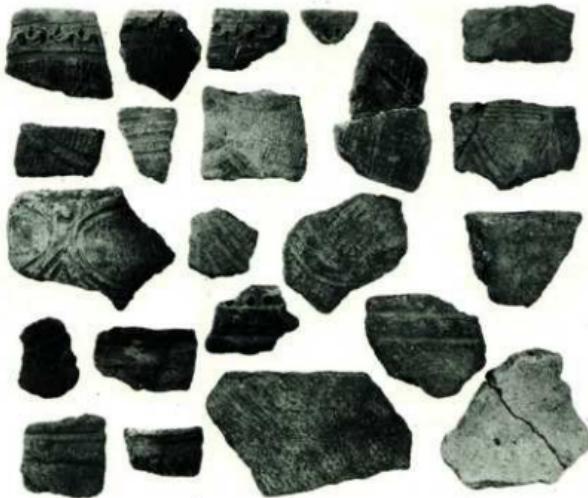
グリッド出土土器（4）



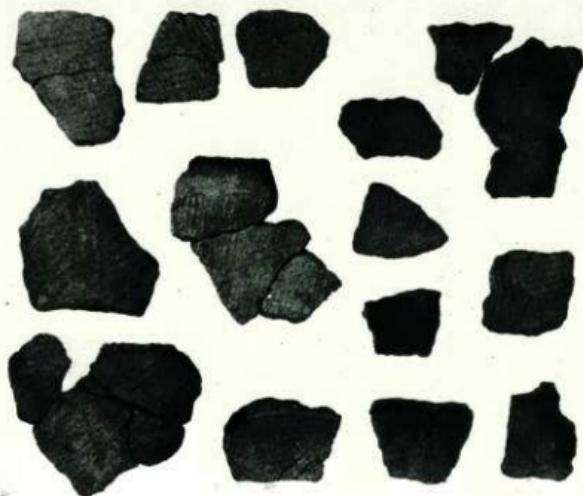
グリッド出土土器（5）



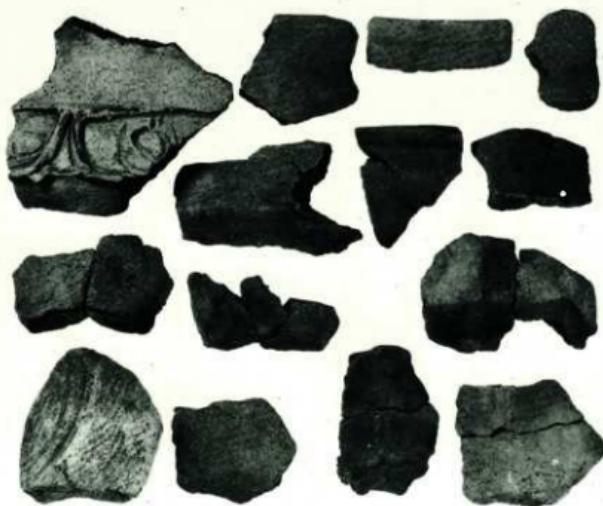
グリッド出土土器（6）



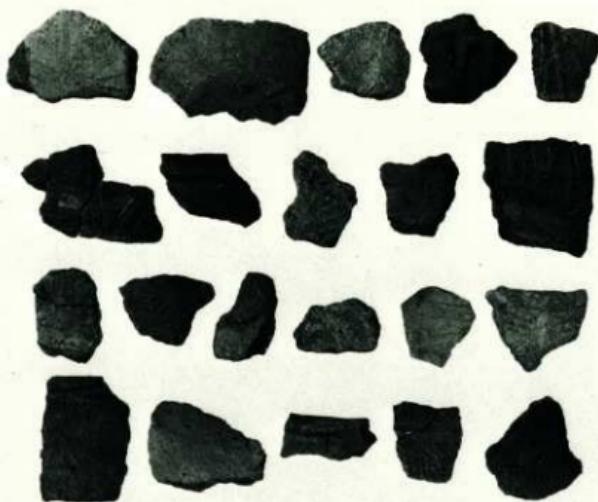
グリッド出土土器（7）



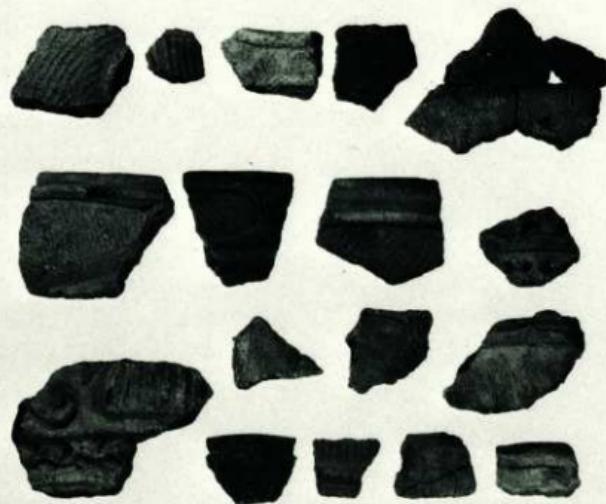
グリッド出土土器 (8)



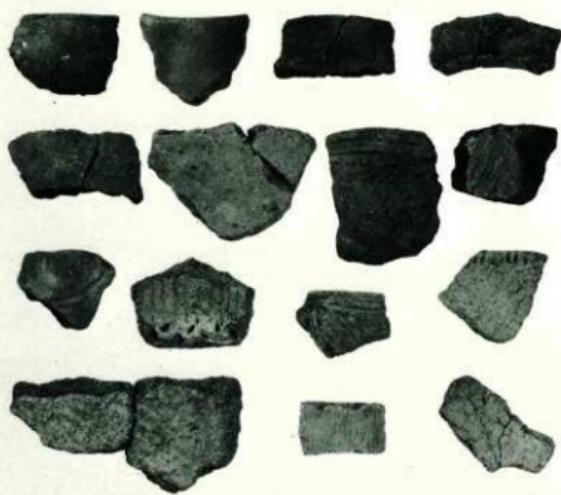
グリッド出土土器 (9)



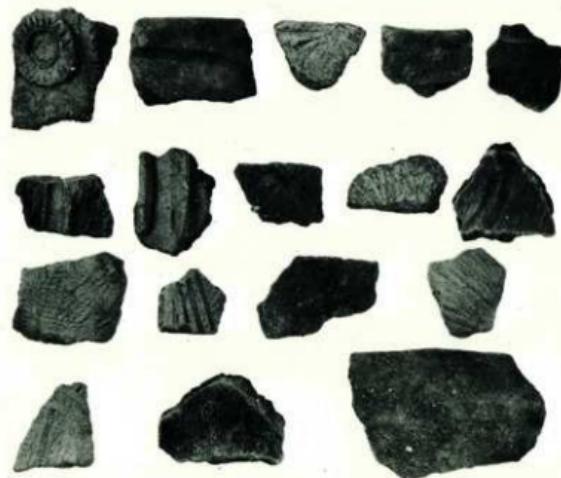
グリッド出土土器 (10)



グリッド出土土器 (11)



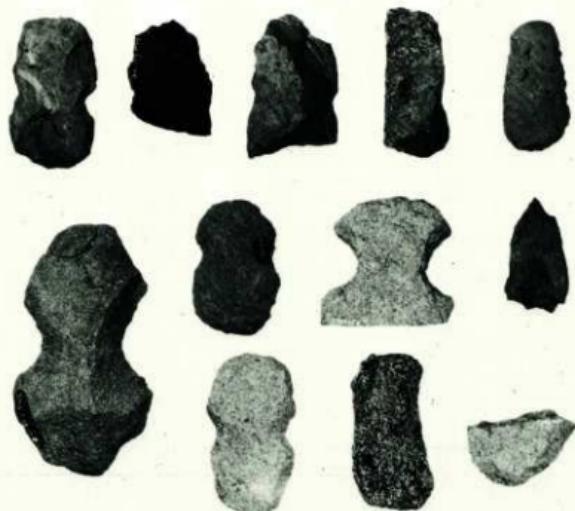
グリッド出土土器 (12)



グリッド出土土器 (13)



遣構出土石器



グリッド出土石器（1）



グリッド出土石器(2)・調査区外表採石器

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第8集

一般国道140号（寄居町・花園村工区）

埋蔵文化財発掘調査報告 I

下　　南　　原

昭和57年3月20日　印刷

昭和57年3月31日　発行

発行　財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
印刷　株式会社　秀　　飯　　舎